

証の雅の川

昭和廿二年七月一日
創刊大正十三年・通卷四〇四号
麻生路郎☆主筆



新春号

No. 404

No. 404

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

— 2月本社句会 —

三味線
平和
山彦
尻込み
兼題

川柳雑誌社主催

新春川柳大会

明けましておめでとうございます。
日時 一月八日(日)午後一時
場所 大阪観光ホテル ㊤三五〇八番
市電道頓堀電停東へすぐ
(日本橋北詰東入る)

兼題
「自由」(㊤) 麻生路郎選
「日の出」(㊤) 北川春巢選
「白髪」(㊤) 西尾榮選
「福引き」(㊤) 松江梅里選

席題 三題(当日発表)
麻生路郎

講演 川柳紅白試合
出席者 全員

余興(当日のお楽しみ)
出席者 全員

短冊交換会
有志の方は各自一葉ご持参ください。路郎先生も出品されます。

表彰
☆昭和三十五年度不朽洞賞優勝者
☆一カ年間本社句会全出席者

呈賞
☆各題三才 ☆路郎選天位に不朽洞賞

会費
☆紅白試合優勝側全員に粗賃
百五十円

幹事
紫香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・庸佑・狂

二・与呂志・白水・水堂・月都・薫風子・永

断・柳宏子・舟遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(㊤切一月六日)

川柳雑誌社句会部

電・住吉㊤六〇八一

日本盛酒坊

和やかに ます一杯

灘の清酒

ニホンサカリ



東京酒坊・八重洲四名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰

不朽洞旬帖

麻 生 路 郎

謹賀新春

一九六一年元旦



おじいさん　もう元旦の咳をする

黙秘権の行使ではなし老夫婦

長寿長寿しなびるだけはしなびたり

恋なつて有楽町に用もなく

台どこの改善汚職の匂いがし

ネオン塔昼はさかなの骨のよう

川柳雜誌新春号目次

題字	麻生路郎	表紙	野尻弘	不朽洞句帖	麻生路郎 (3)	川柳における敬語について	北川春果 (12)	正月の川柳	船木夢考 (29)	課題と選者	高鷺亜鈍 (25)	新春窓口談義	麻生路郎 (4)	羽田を発って	足立春雄 (32)	カニと切り株	東野大八 (15)	鯉やく巨歩	直原七面山 (36)	句評に寄せて	特集「囁目される戦後作家」	高須塊人・大島濤明・北川春果 岸本水府・中野風柳・布部幸男 三条東洋樹・須崎豆秋	★現代柳人録	短詩文学作品展	中將姫	富士野鞍馬 (28)	不出席の人々	不二田三夫 (42)	不朽洞の人々	黒川紫香 (41)	★	川柳塔	麻生路郎選 (6)	同舟近詠	諸家 (19)	近作柳櫓	麻生路郎選 (20)	金泥集	麻生霞乃選 (35)	各地柳壇	柳界展望	不朽洞会から	入門講座	清水白柳 (34)	一路集	菊沢小松園選 (38)	★柳櫓室	復職 (39)	国弘半休選 (46)
----	------	----	-----	-------	----------	--------------	-----------	-------	-----------	-------	-----------	--------	----------	--------	-----------	--------	-----------	-------	------------	--------	---------------	--	--------	---------	-----	------------	--------	------------	--------	-----------	---	-----	-----------	------	---------	------	------------	-----	------------	------	------	--------	------	-----------	-----	-------------	------	---------	------------

疲労・二日酔・体力減退に

■適応症…肝臓疾患の予防と治療・疲労回復・二日酔・食欲不振・つわり・肌あれ・ニキビ・動脈硬化の予防・脚気・虚弱体質・糖尿病・食中毒・湿疹など

強肝・解毒新ビタミン

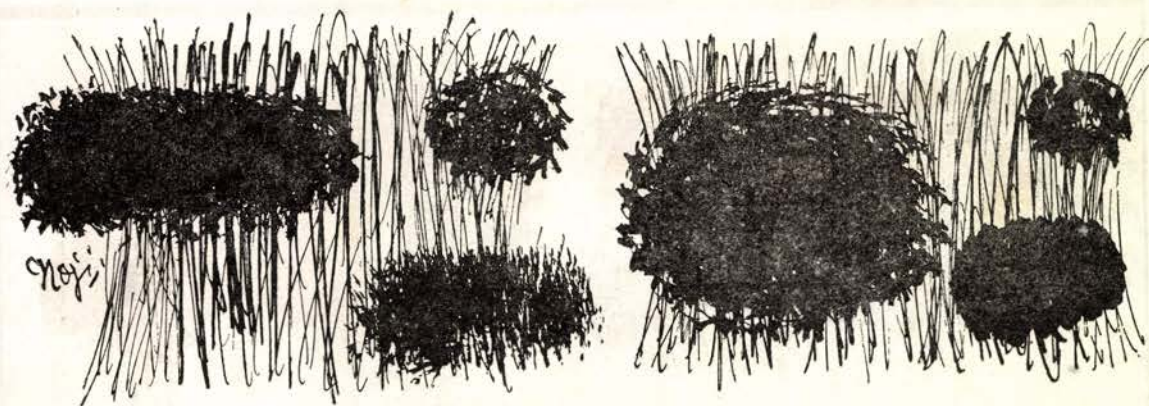
チオクタン



藤沢薬品 ■ 大阪道修町



疲労・二日酔い
体力減退に
チオクタン



新春・窓口談義

麻生路郎

関西短詩文学連盟を結成してから早くも、五カ年経った。仕事としてはまだ講演会と、作品展の二種目をやったのだが、

短詩文学連盟の反響は大なり小なり関東方面や中部日本・北陸・山陽方面に拡がっている。こんなことはないといえども目的を達成されるものではない。ポツポツ根気よくやるつもりだ。目的さえよければ、一番打者が仆れても、二番打者がやってくれるものだ。私がホームランを打つか、どうかは疑わしいが、やれる限りはやるから、まあ見てください。一つ一つやって、かつこうがついたら、その次をやる。これが私のこれまでの戦法だ。そんなことが出来るものかという言葉は私の耳には這入らない。いいと信じたら、何んとしてでもやりとげる。これが今までの私のやり方でもあり私の生命だ。川柳の社会化運動もそうだったが、川柳の職業人もそうだった。いのちある句を創ることは云うまでもないことだ。これは一生の仕事だ。みんなもその気になって呉れ。そこには短詩文学としての躍進があるのみだ。

川柳を創るのには発見ということが大事だ。勿論それだけですぐれた句が出来る訳ではないが、新しいものを見つけることは必要条件の一つだと云うのである。それは絶えず奇抜なものを見つけろと云う意味ではない。そこらにゴロゴロしているものでもいい。誰もが、まだ気づかないものを発見しろと云うのだ。

はじめて、海鼠を食った人のように、はじめて西瓜を割って、あの真紅の中味を食った人のように、社会から、人のジタマの中から、誰もが発見しなかったものを発見しろと云うのだ。

発見ということは、なかなか難しいことでもあるが、案外やさしい場合もある。本人が少しも気づかないのに、第三者が、何んの苦もなく発見する場合もある。

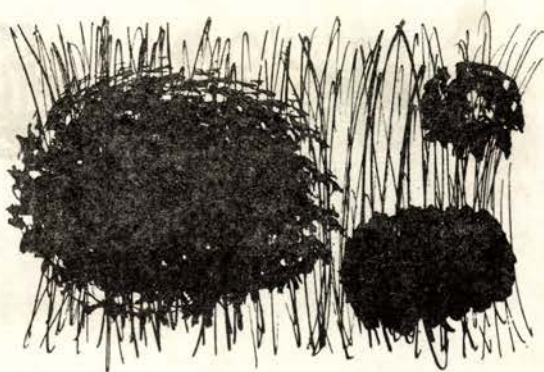
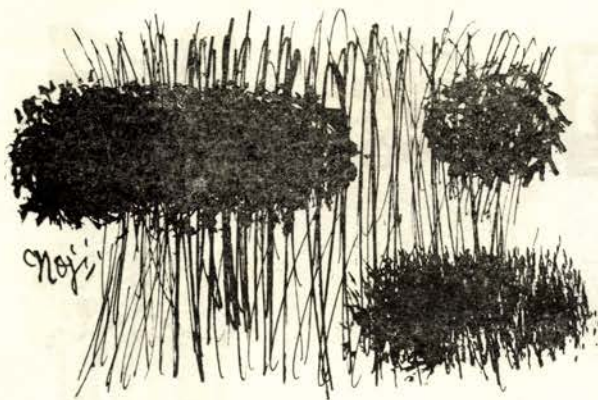
例を挙げよう。

戦後のことである。駐留軍の通訳をしていた竹内逸（この名はハッキリ覚えていない）とか云う人が、通訳そのものは苦しいとは思わぬが食事が充分に摂れないのが辛いと云われていた。会食の場合、ノドの鳴るような馳走が出ていて自分にもあてがわれているのであるが、対者の一人が喋べられると、自分は直ちに、それを通訳しなければならぬ。その対者が客辞をされれば、これ又直ちに通訳しなければならぬ。対者同士は相手方の喋べっている間フォークやナイフを動かすことが出来るが、通訳はそれが出来ないで常にひどい思いをするとのこと、私等も度度外人との会食をし、通訳する場面に接している。まして、多くの場合、通訳に喰べる暇のないことなどには思い及ばない。これは本人の告白によっではじめて気づく発見である。

中央公論の十月号に、三浦朱門氏と、曾野綾子女史の対談が載っている。

その対談の中の三浦朱門氏の言葉に、「語学の入門書の編集がまちがっていると思うのは、たとえば文例が、ペドロよ、本はどこにありますか、ハイ、一冊の本はここにありますが、という調子でしょう。」

しかし、たとえば吉行淳之介がつかうとすれば——おばさん、面白い女の子はいないかな。それはたしかに前にはおったけ



ど、いまは刑務所に入ってるわ。これが実際の会話ですよ。入門書ってのは、どうしてカマトトやるんでしょね。腹がたつてどなってやろうと思っても、そういう時の言葉はないんですからね。癪にさわって……(笑声)」

と云われている。これも入門書の虚を巧みに衝かれている言葉で、たしかに一つの発見である。私たちは常に、ハイ一冊の本はここにありますが、入門書だと信じて、三浦氏の云うようなことは見逃がして、少しも不思議だとは思っていないからである。実際問題ではそうした会話が出来ないので歯がゆがっているくせに。

川柳を創るのに、天井を睨んで、句が少しも出来ん出来んというている、句の出来ん族は、自分を、社会を静に凝視する以外にいろんな書物をのぞいて見る必要がある。斯うした発見の実例を、そのまま句にしたところで、新発見にはならないが、そうしたことを読むことによって、自己の眼はたしかに拡大するものである。

それにつけても、私としてはヤングゼネレーションの作家たちが爆発的に躍進することに大きな期待を持っているものである。

私はよく柳話をやらされるが、相手によって喋べる内容が少しずつ違う。初心者で入門したい人(個人の場合)、戦城の会でこれからはじめようという場合と、継続して開いている場合と、柳社の句会での場合

とではみなそれにぞれ違えなければならぬ。戦城で情操教育のため、川柳とは何かという話の場合には川柳の生い立ちを話の二〇パーセントぐらいは喋べることにしている。彼等の多くは知識としての川柳を求めているからである。

それから古川柳についても、古句を例示して、解説的講義を三〇パーセントぐらい話すことにしている。それから、よく質問の出る川柳と俳句との相違点とそれぞれの特徴を適宜に説明する。最後に、その会合の如何によって、興味的に談しながら、川柳することが私達の生活にとってどんな関係にあるかを述べる。これが私のもっとも談したい点であるので、話に非常に熱が這入る。そこで私の柳話は終るわけであるが、予定時間から一〇パーセントぐらいは時間を残し、その時間を質問の時間にあてる。この時、活潑な質問が出る時もあるし、質問が出ない時もある。こまごまとした作句法を毎回継続して講義する場合に

は拙著の「川柳とは何か」を教科書に使っているが、これによって指導すると確に進歩が早い。しかし、そうした方法で川柳を学びたいという集会は比較的少ないが、将来はやはり教科書による指導をすべきものだと思っている。社の句会では、こまごまとした作句法について述べないことにしている。たいてい人

生問題にひっかけた柳話が多い。社会の出来事と関連した話や、川柳の時流について談すこともある。たとえば川柳を他の名称に改称したらという提案が日本のどこからか出た場合、それに対する私としては意見を句会場で発表する。それに対する質問があれば勿論応答する。

社の句会では私が主として談すことになっているが、社の誰彼にと云っても二三の人に、柳話や句評をやってもらっている。喋べると云うことは、その人にとっても、自分の思想がどの程度、自分の思っているままに伝達出来るかを知ることが出来るので、非常に有益なことだと思っている。こういうことは二三の人に限らず、多くの若い人達にもやってもらいたいと思っているが、それにはその方法もあることを知らなければ、いたずらなディスカッションは時間を潰すばかりでディスカッション必ずしも有益だとは云えない。



結婚式場 長生殿

神殿(2)控室(16)宴会場
(和洋9)御待合室・更衣室・美容室・写真室の
ほか、貸衣装一切を完備
しております ●6階

金曜
定休
松坂屋
大阪日本橋三



豊中市 戸田古方

ちゃんとあるのによろ見つけずに

大阪市 市場没食子

吞まし甲斐ない男だがほっとけず

罷落し老人臭をちと拭い

一人一室を子供に言い出され

大阪市 正本水客

何処へゆく煙か空の青のなか

僕もお人好しこんな言葉で気が和み

黙殺という手もあったのに気付き

大阪市 丸尾潮花

落葉踏み踏み他人の恋を見て歩るき

塗って着ていたらお金になる女

歌麿が筆にしそうなしよさを撮り

大阪市 西いわを

さるほどに素性明かさぬ女将にて
新築の間取り女房へ委しとき

アムールを唄って母は冷かされ

堺市 八木摩天郎

美声だが天は二物を与えずや

年よりは少しおませの靴みがき

府立薬寿荘にて

齡問うに遠慮のいらぬ薬寿荘

岡山市 武部香林

火鉢文化かこちながらの文化祭

大阪市 北川春渠

服地屋へ腹へらしにとよい暮し

数字には弱おおまんねと芸術家

モーニング着るとお酒が弱くなり

ホノルル市 築山快歩起

ブロックと燕尾簞笥の底に古り

円珠の配当ためて観光費

犬までがブルジョアらしく斜に構え

大阪市 須崎豆秋

退院(二句)

退院をする逃げ足の速やいこと

狭くともわが家障子に陽が当り

酒呑めぬ死に損ないのお元日

ホノルル市 羽佐周柳葉

人種差別皆神の子であった筈

堺市 吉田圭井堂

機械化の時代霊長引摺られ
低姿勢を野党が真似たきこちなき

昼休み中です事故も放つとかれ

山口県 国弘半休

バチンコもゴルフも知らず恩師老け

鉢持つ毎に不器用自嘲する

口実が段々上手に学資がかさむ

防府市 長野井蛙

過去のことは言いつこなしと女酌ぎ

旅のアリバイにガイドを入れて撮り

大臣が放言しては新語生み

岡山県 直原七面山

お見合へ家の掃除が行届き

参観日の着物の柄を子が指図

映画がめつた奴を観て

死体までボンコッしちゃう釜崎

大阪市 西森花村

神無月神前結婚休んでず

電気釜それでも茶碗と箸が要り

七五三よくぞうちの子風邪引いた

鳥取市 河村日満

会長の藍綬褒章受賞に

長生きの方にも勲章あげてほし

殺し屋の姿右翼という姿

刺されても平和を願う顔は笑み
抗議集会うしろの方はしゃがんどり

チャイコフスキーへバレエの足のいい動き



豊中市 足立春雄

身近くに暴力を聞く文化都市
生きている方はお通夜のことでもめ

方医傳仇花の句に供える

仇花であつたとしても散り急ぎ

倉敷市 木村 千容

五本松しんどしんどでたどりつく
八雲遺著抜き読みすれば夜ながし

金婚の神楽へ妻は目を細め

神都大社静かに秋の雨となり

加賀市 野村 味平

うぬぼれは自分の才に溺れきり

のこぎりの癖も気立のようになり

大阪市 木村 水堂

絵にかいた餅に似ているスローガン

一票へ出したい人が見当らず

高槻市 福田 丁路

芸術としての露骨な写真展

保釈金払うて肩で風を切り

無情なるかや未成年入場禁止

大阪市 真鍋 一瓢

朝霧の底にきつちりあるレーン

野心捨てて遠慮知らずの平で居る

未練ではなし慰藉料が足りませぬ

大阪市 後藤 梅志

鶏になにかもらっている小猫

文筆も思想も枝葉繁げるのみ

整然とやるなあ京城のデモ

友達のように父娘でめしを食べ

米子市 小西 雄々

薫風子氏外句会に出席

なつかしい大阪弁に座が和ぐみ

読経する隣り座敷に膳が待ち

大阪市 山川 阿茶

赤阪の女将の世話になる議員

解散の議員又逢う日を約し

大阪市 金井 文秋

くれるもの何んでも貰う里帰り

給料日夫唱婦随に戻るなり

頃を見て紅一点は先き帰り

加賀市 那谷 光郎

まだ紐がついた眼鏡で母は縫い

医者を無視炎で治ったとは癪な

口喧嘩しても編針間違わず

日曜大工妻に指図をされて出来

度々の見合いビジネスめいてくる

岡山市 浜田 久米雄

靴下のままで元日暮れかかり

元日へこの一年も斗争か

丹前を着てお元日らしくなり

大阪市 菊沢 小松園

ふつつかな娘と言うておく此の場合

先生へ色目を使う子も交じり

親の目にどの審査員も氣に喰わず

岡山市 逸見 灯竿

モデル動かず裸婦画動きそう

こう来ればこう行く石がみんな死に

出雲市 尼 緑之助

会場の時計よ祝辞がまだ続き

エノケンに似た人も居る終列車

あの子にこの子離ればなれの職に居て

大阪市 水谷 竹莊

好きでない人の見舞をもて余し

惚れているくせに悪口ばかりいい

鳥取市 杉谷 湖山

都々逸の音痴音痴が補足する

月後れの雑誌で秋の夜を更かし

ああそうか娘この頃落ちつかず

京都市 大鶴 喜由

その上にいささか欲しいセクシー美

日溜りを丸くつくほる母の母

たんぼ道娘にこわく暮れかかり

へそくりで身内の義理がやとと済み

金で寝た弱さ出るとこへも出れず

尼崎市 小林 文月



賀状こぬ友を死までも想像す

大人だけバチンコというバクチあり
さんまのように先のとがったハイヒール

東京都 山根 白星

朝寝する女に学費貢がれる

臨終へひとり時間表を読み

奈良県 西辻 竹青

差押えなさいと債務者フテクサリ

自宅へと言わんばかりに名刺出し

調子はずれの唄でも月はさえている

呉市 林野 甦光

重荷引く老牛にまだ道遠し

雨宿りへ発車時間を知らせに米

湯の町でバツタリ逢うた事にして

初日の出スリ寝不足の眼で睥み

岡山県 福島 鉄児

三度目もおろし悪縁まだ切れず

もと妓楼今はオムツが干し並び

岡山市 服部 十九平

実力を運がよかったことにされ

エレベーター一人で乗って照れ臭し

先生が自由時間にしてサボリ

尼崎市 長谷川 三司

教会の裏で街娼鐘をきき

もう花もおわりの菊の枯れんとす

場末の小屋を尋ねて

落ちぶれてこんな筈ではない役者

入墨も見せて佻しい女形

西宮市 若林 草右

ご期待に添うとは汚職のことらしい

見送りは子ができてから門ですみ

虫籠の天地と知らず鳴きつづけ

方正氏仏前へ

辞世とも見えぬ元氣な句の姿

広島県 山田 季賛

数珠買って帰った母の京の旅

十一月一日岩日線開発

政治線後の赤字はどうする気

生きるため命をかけた職に生き

岡山県 田村 藤波

指を切ってから庖丁を侮らず

候補今日大衆食堂で昼を食べ

ミシン踏む妻の魚の目削らされ

風車よく廻つとる父の肩

幸福は孫の体温背に感じ

電化してコオロギ今年から鳴かず

児島市 本田 恵二朗

三ッ揃切符探すに手周がいり

優勝台に立って女にたちかえり

京都市 松川 杜的

汚職の家と御近所も寄り付かず

ポイントががちり故郷へ汽車曲る

殺られたは他事でない友の子だ

鳥取市 森本法泉子

妻入院手術す

縫い物も洗濯物もすまして出

病人が食べて呉れたをふれ廻り

落着いたのは妻の座に妻が居り

岡山市 津田 麦太楼

腹上死でなくて老らくほっとさせ

よろめいて見ても手応えないあんな

着ぶくれたドテラ二号のお古らし

生たまご象牙の箸が高く鳴る

堺市 高崎 雄声

言い足りぬ明治言い過ぎる昭和

島根県 藤井 明朝

新鮮の魅力ふりまく新婚の

力では勝てず理屈で押しまくり

又一年御無沙汰します年賀状

当選の賀状政治家らしく見え

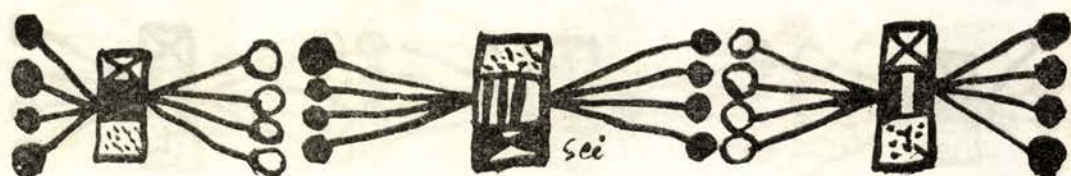
赤旗を振る看護婦の赤い頬

岡山県 永松 東岸

はしなくも月賦で買ったものと知れ

病床を見舞い景気のいい話

倉敷市 野田 素身郎



安月給だけでみてくれ子は太り

こわれてるほうの玩具を手放さず

子供に起され妻に使われ日曜日

この秋は勤めをひいた稲を刈り

ほんとうの秀才遊ぶのも遊び

大阪市 伊達 堰子

カスバ

差入れの苦勞で親分若死にし

二上山附近

六地藏ねむる夜霧の幕が降り

大阪市 不二田 一三夫

わが産ぶ声へ親は期待をかけたろに

五十年ぶすぶすいぶるように生き

アダムとイブのように少女と少年と

国会に三つの議席

共産党囃んだご飯の砂でよし

兵庫県 酒井 ひか平

気の弱き妻を叱ってからあわて

神官の夫人は習字だけが友

遅くとも牛は平和な歩を運び

神戸市 丸川 初甫

世話好きのお人よしのと馬鹿にされ

夫婦或る夜日歩の話を楽しめり

唐津市 新岡 回天子

失対の日数で出来た砂防工事

岡山県 池田 古心

夢だけは捨てず秋刀魚を焼けばとて

修理費に命とらわれている旧家

口説くなら今です襖締めて坐し

大阪府 早川 清生

孝行の噂へ嫁の米手がなし

現地妻めとり邦人会へ来ず

青春を無駄にし軍歌しか知らず

人妻を恋いしあわせか訊くばかり

岡山市 武部 若菜

コスモスの天下家老の古屋敷

池田動物園にて

この鰐は生きてますのと聞いてみた

堺市 辻 圭水

菊の輪が大きく見えたりうれしい日

内輪もめ小鳥は餌を忘れられ

妻として有頂天をば見てられず

岡山県 野々口 美舟

ほんとうはせっぱつまった顔でなし

つましく会費払える幸を知り

西宮市 小浜 牧人

才たけた妻にサラリー見くびられ

岩風呂の麻雀疲れ湯が長し
候補者へ日暮れの街は素ッ気なし

大阪市 菱田 満秋

集金に行けば集金に出ています

勉強をしすぎる一人娘なり

元日にもう借金が口に出る

兵庫県 前川 左文字

聴診器何かを探り当てた眉

奥様が運転手なりデラックス

大阪市 橋高 薫風子

元日だ吸いさし喫うのなど止そう

霊柩車辻を曲ってから速し

昼の月お前も二日酔なのか

母入院

一匹の蚊に病室の広いこと

鳥取砂丘

旅人も月もやがては去る砂丘

大阪市 西川 晃

泡の如きことしゃべる楽しさ

色即是空炬燵はのぬく

中年の眼処女のからだを撫でまわす

釜ヶ崎風景

兄貴から情婦一人を譲りうけ

吸血鬼みたいな情夫を愛しぬく

神戸市 仲 どんたく

ストリップバー楽屋の窓はビシヤリ閉め
金のない時は風邪でもひいておこ



スクータをルノーに替える程もうけ

お願いをしますとここでもやっている

天が下置くところ無し自家用車

平田市 久家代仕男

選挙にはかわりもなく菊白し

米代金農協すつとんと引き

大阪市 本多柳志

回顧十五年

唇をよせてリンゴの歌を聞き

生きのびた身をメチールに奪られけり

君が代も知らず卒業して戻り

総裁は元宮様という式辞

正直に法を守って死んで行き

出雲市 原 独仙

過去のある妓か軍歌へ涙ぐむ

最高点の中にわたしの票もあり

父と子のもめたは祖母の浮動票

岡山市 江 国 函 谷

曼陀羅へ三百年のすすをつけ

いつ見ても同じ処にある榮

茶器のつや出して貧乏気にとめず

岡山市 光 好 陽 子

美しい人には愛想のよい守衛

候補者のもうはったりにだまされず

掃き寄せる落葉に心ふと通い

西宮市 河相すゝむ

新道路片側だけでほっとかれ

値を聞いて高い方のをねだるなり

西宮市 野 呂 鶴 汀

芸のない芸者に惚れて居る情事

額の面の如き静かな湖畔なり

西宮市 樋 口 舟 遊

コマ廻るあいだは意欲を燃やすなり

根性があつたら借りに来いと云う

阿呆なこと云うて温泉気分なり

うらはらを云うも他人というこわさ

平蜘蛛のような候補をおかしがり

新潟県 高野むじな

自分だけの胸算抱いて候補ねる

コマーシャル聞か本文始めない

結婚式を終えて

恋仲の続きの様な昨日今日

高槻市 辻 白 溪 子

コマーシャル数字で儲かることにふれ

屋根だけが見えるお寺をガイド指し

大阪市 欄 蘭

日曜日子供のハゼつり見るポリス

大阪市 石 倉 旅 風

酔うて言う訳ではないがみなさもし

鳥一羽みかけぬ空の街となり

大阪市 魚 住 満 潮

底ぬけの阿呆女房を売ろうとし

執達吏虱一びき貰うて去に

昼飯を中風ちょこちょこ忘れられ

前科拾犯重ねた男と添寝して

こつまなんきん触っただけでもう姪み

三本立まあ閑人のいることは

素足の児等にもう正月が目の前に

堺市 田 中 狂 二

姑が嫁にまかれてつつがなく

鉄面皮又おめおめと立候補

大阪府 林 昌 男

黒緇子がびったりしてる不倅せ

女文字やんわり嫉妬つめて来る

どん底へ勝負な妻が居てくれる

愛媛県 村 上 旭 童

秋日和野良の主役のいれかわり

選挙戦つわもの共のお国入り

無茶いえる程借金をこさえたり

倉吉市 大 前 鳴 恍

更年期かいなと妻もさりげなく

縁談がまとまり和服ばかり着る

理想論一挙に母をこきおろし

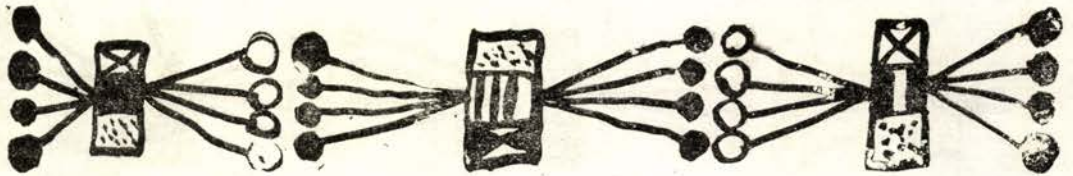
鳥取市 北 村 三 歩

だまされてなるかと母の票固く

ストライキ又やるのかと居直られ

彼奴また民社の様な意見吐き

続西成界わい



神戸市 傍島静馬

ロマンスカー仲良く並ぶホシとデカ
英語堪能オンリーとしてこと欠かず
何見ても金に見積る癖があり

長生きをしてねと母に子守させ

笠岡市 木山遠二

茶の心得いささかあつてぎこちなし
代代の家に年寄りだけ暮らし

大阪市 中谷ハナ子

夫婦で免許をとった自慢が出
弱うおまんねと医学辞典程知って

岡山市 宗高矢寸志

どう賞めるべきか社長の抽象画
先生は相互理解を説いて逃げ

居並んで屋上ゴルフを拝見し
社長らしくなったら使い込みをされ

株の値と血圧上り下りする

大阪市 河井庸佑

八方美人その割合に出世せず
自分では出来すぎた姑と思ひ

大阪府 谷沢好祐

又嫌な選挙と電柱思えども
うちの町会にも放送局がいた

泉大津市 高津徹也

校庭の寂莫へ登校の一人っ子

愛媛県 横紫光

執行部一任デイトが待っている

プレセントされたライターもう落し
清濁をあわせて呑んで濁に染み

青森市 工藤甲吉

十円を渡し車掌の手にふれる
黄と赤のリングが皿に夫婦めく

いかにせん夫ある人から手紙
おんな殺されて港の夜明ける

五風十雨木の実草の実玉となる

西宮市 門永三舟

肝心のとこで忘れた病み上り

玉野市 伊原明林

秋刀魚焼く背へ夕刊投げこまれ
一棟を他人で区切る薄い壁

巻尺と一緒に走る大学出

大阪市 藤村梨花

南九州旅行

ひっそりと稚葉の恋の谷も秋
火の国の乙女に神話うけつがれ

創世の姿を今に地を鳴らし
湯の宿もせんせセンセと落ちつけず

よかおごじよ(美人)おごじよと生徒おどられ

松江市 小林孤呂二

これだけは特価ですまぬ七五三

どこか俺と違ったところがある児でたのし

神戸市 室田千尋

子の意見聞けば貰えと言うてくれ

街娼の嘘でなかったのが哀れ
かばいあう息子夫婦が気に入らず

豊中市 林夢虹

うち継子か知らと少女思ふ日の
少年の頃の涙は珠となり

坑夫街裸電球点もりおり

尼崎市 吉本菁風

病み上りアンバイヤーを頼まれる
詰襟を着て仕送りを続けて居

懲すてて正攻法で行くとする

西宮市 山本一傘

高島田ひげする程の顔でなし
悪役が死んだでおぼはん納得し

愛情を囁やきやあんだ詩人やねえ
金溜めて養老院へ行く孤独

長男は麻雀だけが親まきり

大阪市 今西生翼

安いとこへ這入れと国立とは云わず
ハネムーンやつれた笑顔帰って来

片側は両角店のアーケード

京都市 室井八九寸

肉牛を肥らすビール失敬する

よそ様の電話を呼としたチラシ

謝りもせずに善処する善処する



川柳における

敬語について

北川 春 巢

もういくつねたらお正月
もういくつねたらお嫁入り

これは昨年末、大阪市営バスの中

で見た広告の文句で、見られた方も多いと思う。「もういくつねたらお正月」という子供の歌をもじって、後を続けたものであることはよくわかる。ここで「お正月」、「お嫁入り」、「おボーナス」の「お」が敬語と言われているコトバであるが、「おボーナス」の「お」に至っては、おどけて言っているというものの、頭にコツンと来るのを感じた。

平安朝時代になると、オホシ（時代）と発音して、天皇をはじめとして、最上級の貴族に対して使われ、次第に発音もオン（一音、一手）と軽くなって中世に入り、使用対象も広がって来た。室町時代末になると、オナカ（腹）、オヒヤ（水）など言うようになり、現在のオ茶、オ菓子、オコーヒにまでだんだん軽くなって伝わっているのだ。コトバというものは何によらず、使っているうちに古びて来て、感じが出なくなるようになるものだが、これなどは最高の敬語が長年の間に下降して来て、現在は敬語とかいいねい語という感じもしないほどになっている例である。それでも我々は普通「茶を飲む」、「菓子をもう一つ」などとは言わないで、「お茶を飲む」、「お菓子をもう一つ」のように言うのは、やはり頭のどこかに、「お茶を」、「お菓子を」

の方がいていい言い方だという考えがあるのではなからうか。

川柳においては、僅かに十七音字という制限があるのであるから、一音でも無駄な言葉は省いていきたいのであるが、我々が日常しゃべっている言葉そのままを句にする、という関係上、日常に「お」のつく言葉が多ければ多いほど、「お」を使った句は沢山に見出されるという次第で「お」のつくコトバを使った句は枚挙にいとまがない位である。

二

「お」+名詞

名詞の上に「お」をつければ、何でもこれが敬語となるので、その数はおびただしい。

これはもとは女コトバである。女がいていいことを心掛けて使っているうちに、その子供が母を真似て使うようになり、次第に敬

語意識もなしに男の大人も使うようになったと考えられる。

落ちぶれた友へお櫃のまんま出し。 小松園

一円のお釣へ女わるびれず。 水客

お。年玉貰えば子供去ぬとい。 愛論

気をきかしすぎてお銚子持ちになり。 葎乃

おえら方やつぱり女工の顔を見る。 方大

「お正月」、「おボーナス」の「お」もこの類である。

「お」+動詞

この類は「お」+名詞ほどど粗雑には作られなかったが、それでもかなりある。

お見（ごらんない）お仕（しなさい）、お言（い）い（言いなさい）などで、そのほか「お」+動詞の名詞形がよく使われ、川柳にも多い。

お流れを頂戴にでる自己嫌悪。 多久志

「お流れ」と「頂戴」と両方で、敬語の意味が強まっている。

現代では「おーなさる」が敬語の言い方である。

お泣きなさいと待っててくれる葬式屋。 古方
お帰りにならす刺身も色かわる。 葎乃



コクヨ
便箋



「お」+動詞の名詞形で、女コトバが一般のコトバになったものに「オナラ」がある。「ナラ」は「鳴らす」ことである。

音のよいおなら乳飲む兒も笑い。 齊花

「おなら」は敬語というよりもむしろいいねい語というべきであろう。

なお、女コトバとは、中世の女房（ニョウボウ）コトバ以来のものである。「女房」は宮廷や貴族の家で、貴人の身近かに仕えているので、彼女たちのコトバは自然に貴族のコトバを真似たものとなり、その上彼女たちは貴人に仕え

ているので、よけいに敬語を使う。従ってそのコトバが上品なものということになり、下の階級へ少しずつ広まって来る。「オモモジ」(お目にかかること)「オスモジ」(おすしのこと)などの女房コトバは一名「モジ(文字)コトバ」とも言われている。オシメ(湿布のこと)オムツ(むつきに「お」がついて下略)なども女コトバで、現在では上品とかいていねいとかの感覚なしに使われている。

孫一人。こんなにおしめもつて来た。古方夢もなくおむつで窓を皆塞ぎ矢寸志

「おにぎり」も女コトバで「握り飯」に「お」をつけて、下の「飯」を略したものである。

お握りで行こか女同志なりお握り屋ガールフレンドにリードされ春葉

「こ」十名詞

「こ」は「お」に「御」の字を当てたのを、音読みしたもので、主として漢字の上に来る場合に使う。

御近所の頓死を保険屋無駄にせず弘道御亭主の儲け誇示した舞ざらえ修三

御援助の賜物ですをもう忘れ御苦労なこっちゃとスキー見送られ修天皇も人気というを御発見路郎



「お」十形容詞

この類もそれ程多くない。「お静か」「お忙し」などである。オイシイは、イミジイから変化したイシイに「お」がついたものであるが、オイシイとなると、意味は「美味」ということに限定されてしまった。

おいし。と云わない人と妻悟る水客茅屋をお静かですと賞められた腹乃

三

接尾語の方は、「様」や「さん」を名詞の下につければよいのだが、簡単に「お」と「様」と両方をつけて敬意を強めたものもある。関西では「豆さん」だとか「お芋さん」のようにとんでもないものにまで「さん」や「お」をつけているが、これは少し行き過ぎのようだ。

奥さまはおひま。まがきの孔雀。お父さんのようになるとはいじらしい。淡舟。おまわりさんを若いと思う程に老け。不二。お百姓さんにたまわる広い天。助け合う夫婦で世間様がほめ笑太

四

金田一京助氏の「日本の敬語」によれば、平安朝時代の物語文学において敬語法は動詞に至って最高調に達したが、存在をあらわす動詞は「アリ」と「オハス」だけであった。しかしその使い方には厳しい限度があつて、「人」にはオハスを使い、「事」にはアリを使つたとのことで、オハスには敬意が含まれている。

地蔵尊大殺されるのを見て

お。わ。父はあらず。壁ばかりなる父の部屋。豆秋

動詞によって、地蔵尊を「人」と見、父を「事」と見るように表現した所にこれらの句の川柳味があるのである。源氏物語は難解であるといわれるが、この敬語の使い方によって、意味の解釈がなされているようである。

なお、上代においては「在り」の複数形が「マス(座す)」で、このマスが単数に使われて敬語になり、「ドイツ語などにも複数形を単数に使うと敬語になる用法の例はある。」「おいでになる」の意味になったらしい。マシマスはマスの重語形でマスと云うよりはなお敬意が加わるのである。王の座にましますメロン売れ残り柳川亭

謹賀新春

中島生々庵
若本多久志
松江梅里

大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇

西宮市津門西口町五〇

「成す」の敬語「ナサル」がすべての動詞の連用形について、それを敬語にした云い方もある。「シナサル」「書キナサル」、「見ナサル」の類である。これより一段上の敬語法は、動詞の上に「お」をつけて「オ書キナサル」、「オ泣キナサル」となる。これは前記の「お」十動詞の項で述べた所で、例句も挙げておいた。この形は自由で、あらゆる動詞がみなこうなり得る便利な形であるが、最近では「オーニナル」という云いの方が普遍的である。ただしこの例句は見当らなかった。

京阪方言の「行きはる」「来やはる」は、この「ナサル型」の残った形らしいとのこと、これは川柳にも方言の味を出す意味でよく使われている。

ストップがわからんのかと

怒りやほり。豆秋
ラジオ又英語で何か云うて
はる。路郎
ストをして万才万才云うて

はる。美喜
またオハスは漢字で「御座す」
と書いたため、これを音読みにし
て「ゴザイマス」が発生し、これ

が二百年もの長い間使われている
うちに段々すりへらされて、種々
の形に変わって来た。その様子は次
の表に示す通りである。

でござんす—でござんす—
でがんす—でがす
であんす—だんす—だす

で(一)ございます—(で)ございます—
でがんす—でがす
であんす—だんす—だす

お仕合せでござんす。かと
先妻が
七面山
早いものだ。また来た赤い
羽根の候
没食子
あの爪弾きは夕霧さんの部
屋でござんす
路生
美人です。美人です。句いで判
ります
愛論
金持は兄なんです。と学者で
居
路郎
クウ(食)に対してタベル・メ
シアガル・イタダクという云い方
があり、次第に敬意が強くなる感
じである。イタダクは江戸期以後
には、モラウの謙譲語としても使
われた。

頂いた。菊の手入にまで来ら
れ
保美
五
もう一度金田一氏にご登場願
うと古来、和歌には敬語が少ない
由である。万葉集でも、妻が夫に
対し、大臣が大君に対し、当然敬
語を使って然るべき所を、敬語な
しに歌っているのが沢山にある由
である。それは何故であろうか。

いのはあるまいか、と推論して
おられる。
ところが川柳ではそういうわけ
にはいかない。敬語の発達した今
日において、現代人の会話をその
まま句にするのであるから、川柳
に敬語の多いのは当然で、我々が
今までに見て来た通りである。そ
して敬語を使うことによって川柳
らしい穿ちや皮肉の味が出ている
ことも、今まで見て来た通りであ
る。

食べるだけ食べて瘦せたい
無理を云い
翠月
お言葉に甘え役人召し上り
甲吉
ようかんを頂いてると地震
かな
豆秋

持つもので、それが中世以後の厳
重な階級制度によって、謙譲語と
ともに非常に発達し、また下層の
者が上流のコトバを真似して広く
使い、今日に至ったものである。
純情な上代人の会話には、現代人
ほど敬語を一一整える習慣がなく
その会話通りのコトバで歌ったが
故に、和歌にも敬語が整っていない

しかし戦後は、敬語の混乱、あ
るいは行き過ぎが識者によって指
摘せられ、去る昭和二十七年には
国語審議会から「これからの敬
語」が文部大臣に建議された。
混乱したままの敬語を、句に作
っては大変である。建議にもある
ように、よく調和し、過不足のな
い敬語を含む会話を句にすること
が大切であろう。「おパン」だの

「おボナス」だの、あるいは
「お気の毒様」だの「お左様さ
ま」などの行き過ぎた敬語は、た
とえ会話には出て来るにしても、
川柳には避けるべきではなからう
か。

★ ★
今東光氏と語る

不二田 一三夫

今東光氏がある文芸講演会の壇
上から、詩や短歌、俳句等を氏の
関係している機関誌へ寄稿するよ
う、聴衆へよびかけたとき、

「川柳は困りますよ、今どき々知
らぬは亭主ばかりなり」ってえの
は活字にできませんからネ」とい
うのである。

コンちくしよとは思ったが、
これは近代川柳のP・Rがいかに
立ちおけているかということの
ほうが問題が大きいようだった。
その後今東光氏と話あう機会が
あって、

「先生のおきらいな川柳をしてい
る者が麻生路郎先生の門下です」
と自己紹介にちよびり毒舌をま
ぜたところ、

「ほくは麻生氏は好きですよ、し
かし大家にも街の川柳家といった
人もいますネ」と、川柳人に好
き嫌らいがあるような口ぶりでこ
の作家も古川柳より知らない人な
のである。

謹賀新春

菊沢小松園

大阪市阿倍野区王子町
三ノ三四
電話 六六四四番

川維豊中支部

戸田 古方

黒川 紫香

村上 ゆずる

竹内 圭三

小池 しげお

永藤 弥平

菊田 いさむ

頌春 辛丑元旦
不具二年口はまた手の
代理せず

高須啞三味

東京都港区芝南佐久
間町一ノ五二武蔵庵

富士野鞍馬

東京都港区麻布宮下
町三〇番地の二

土井文蝶

大阪市西成区松通
九ノ二二

・カニと切り株



(文楽人形のカニ)

東 野 大 八

こそ文楽人形の真の味、と推賞している。

さきごろ当地で開かれた郷土の文楽人形の首の展示会で名作、逸品、ケツ作が百七十も並んだ中で僕の一等好きな首がこれだった。

幽玄、怪奇、呪ソ、憤怒、歎喜、諦観と男女合せてそれぞれの表情を土の形態にたたえて人に迫る郷土の芸術は見事だったが、僕は文句ぬきにこれが大好き。今とき文楽の旅回りというものはないが、幼い日の祭礼、縁日にはよくデコ芝居が店にぎやかな町河原のつみの上にかかった。ムシロがけで、舞台が高く黒衣しよの太夫がお七や光秀を生きているものの様に見事にあやつる。太夫の重くて高い下駄が、杉板の舞台でカタカタ動き回るのを、僕は懐しく思ううかべる。ごろごろしたムシロ敷の観客席の間から、青い河原よもぎの葉が、鼻たれ小僧だった僕の鼻孔を快よくくすぐった。幼い日のそんな思い出が、この土偶のカニの眼玉にただよっている。そんな僕にはこの顔がうれしいうら。僕はこの顔だけを写真にとらせて独り悦に入っては軽口をたたいた。実をいえばこのカニは伝統川柳の味かもしれないと思いがら……。

人形の首のついでだが、一昨年だったか、本誌にも紹介した田空さんの彫刻がだんだん世に紹介され、権威ある各美術雑誌をはじめ

め単行本がでるやら、鎌倉の近代美術館に田空展が開かれるやらで目下一種の田空ブームである。田空研究で地道に歩いてきた土屋岐大助教授は田空が世に出て目下大層なご機嫌々埋められた日本彫刻史の空白々という中央美術界のキヤッチアップに海外紹介も間近いと大ハッキリ。もともと県外で田空の記事を掲載したその第一号は川柳雑誌だったが……。

写真つきで、すでに本紙で紹介済みの田空彫刻だが、彼の仏像はナタで切り株をたち切り、流れる木目を衣とし、丸い節目を腕の節にするなど、断面と柱目に彫塑の味をソボクに生かし、ザン新の形態はつきるところがない。芸術はムダを一切省いた抽象要約の程のよさで生きるものだ。僕は田空の



(田空作の木刻不動明王)

する、とべたはめである。彫刻家でよく知られる高田厚厚氏などは田空について「十二、三世紀にロマン・ゴティックのカテドラル(寺院)を築き、その装飾を彫刻した無名工人たちの謙そんな知恵を、十七世紀に見る思いがする」とまで言っている。

僕は田空が、古い時代に生きながら人知れずが道を行つたひたむきな生き方に、今日の彼の作品の評価にたよることなく、ここからの羨望と敬意を表したい。というのは、彼はこれみよがしに仏体を刻み、名利金慾を追ってノミをふるった人ではないからである。々木仁のツボクでニセ作争いの親子げんかをくりかえすバカバカしい当節だけに一層その感が深いというわけだ。

文楽人形のカニも田空の木刻も、わが身一つの個性と才能と表現で他を顧みることのなかった立派さ、謙きよさに僕はただ頭の下る思いがして時には胸がいつぱいになる。名作とはめられるカニのすつとほけた顔、近代彫刻の空白をうめるわが国の影祖とたたえられる田空の木刻、その二つは決して今日の名声を夢だに意を止めていなかったことがうれしい。



囑目される

戦後作家

(順不同)

所属する吟社を問わず、柳界のあすをになう第二の太陽を、諸先生方にわずらわせ、ここにご推薦ねがいました。(編集局)

斉藤はるゑ

堀口塊人

顔も知らない。
歳も知らない。

いつ頃から「川柳しなの」へ投句されるようになったのかそれも知らない。

巡回の映画に泣いてこころ晴れ
訳のありそうな芸者の下手な唄
若い女性の句には、いやに詩を

きどって感傷過剰で、中味のうす
つべらな作品が多いものである
が、この人にはそれがなかった。
新聞の見出し明るく梅雨晴れる
透明な鏡におう朝の視野
骨組がすっかりしていた。言葉
に無理がなかった。
ささやかに嫉妬し合って幸せに
夜の抜毛さとき心にまたからみ
触れるものなくて枯葉が月をさ
する
人間の心理を深くみつめなが
ら、それを詩情に包んでしまう作

家であった。心理解剖の鋭さを
を、美しい字句に再現してみせ
る、技巧のあざやかさに私はおど
ろいた。それに注目した時には既
に故人であった。娘さんか奥さん
か、それとも水商売に関係のある
女か私は何も知らない。

田口麦彦君

大島 濤明

戦後に現われた新進作家は、全
国各地に多数簇出してゐるのであ
るが、その中で私の手近かな方面
から推薦すべき好作家を求めるな
らば、まず噴煙吟社のホープ田口
麦彦君に指を屈するものである。
麦彦君は昭和二十八年六月、熊
本に未曾有の被害があった際、
水引いて誰を憎くもう泥流す
の一句をものしたと云う、処女作
としては、着想に於ても、叙法に
於ても些の難点もない名作であ
る。麦彦君はこの句を詠んだ動機
について、大水害と云う災禍にお
つつかって「人間が生きる」と云
うことがどんなものであるか、と
云うことを此の十七字の短かい言
葉でぶちまけたのだ」と言ってい
る。五十年振りと言う大水害に遭
遇した熊本市民は、先ず生きる、
人を助ける、災禍に堪える、等々
人間感情の動揺する中で、天災に
対する諦観と、発憤とに鎮まって
行く市民の様相を捉えて、君の社
会観、人生観を閃めかせている。
土曜日の顔をかくせぬ勤め人
昭和六年並米利加合衆国で生れ
両親に伴われて朝鮮から満州へと
転々、物心つく小学時代は北満州

の齋々吟爾で
育ち、そこで
父を喪い、間
もなく終戦に
遭遇、二十二
年引揚げて故
国に帰えり、
現在は熊本産
信病院経理課
のサラリーマ
ンとなり、優
秀職員として
上下の信用も
厚い。

この句は勤
め人として最も楽しい土曜日の情
景を卒直に表現して遺憾ない。又
ラーメン一杯働き蜂を落ちつか
せ

の句を詠んで、サラリーマンの生
涯を、只働くだけに生きている働
蜂に托して、所詮は食うことのみ
に帰する月給者の様相とその諦観
とを詠出している。
スト安結飯場の煙まつすぐに
川柳が社会批判詩であり、人間探
究詩であることに共感を持つ麦彦
君は、三池争議の実体を目のあた
りに見、現代社会相を脱み、もし
て労働問題への雑感と相姿とを、
審美的且つ詩的に表現している。

口笛を吹いても生計ごまかせず
世相を衝き、生活を描写し、人情
を抉明し、しかも美を取り入れ、
詩感を躍動させる君の巧みな作句
力、鋭い思索は、これ等君の数句
によって窺い知られるであろう。

麦彦君は昭和二十八年噴煙吟社
に入り、爾来例会にも大会にも欠
かすことなく出席し、常に拔群の

にきび
治療剤!



チューブ入

200円

成績を納め、而かも作句に随筆に
或は又柳論、詰評に行くところ可
ならざるはなき有様である。わが
噴煙吟社では、良き闘士を得たこ
とを悦ぶと共に、編輯、運営の大
部分を君の力に委ねている。斯の
ように、麦彦君の如き有為の士
は、正に将来川柳界を背負って立
つ全国的な逸材であることを推賞
期待するものである。

★

北村白眼子

戦後各地柳壇の復興してからも
十数年経ちますから当北海道柳壇
でも他聞に洩れず種々の曲折盛
衰があり、有望新進柳人何时の
間に消えてしまったのも少くあ
りませんが、左に現在隆盛の六吟
社から老生の囑目します、十二作
家を推薦いたします。柳歴に就て
は確然としませんので十年選手と
五年選手に分けました。
高瀬剣逸 (札幌川柳社、柳歴十年)

朝日よ夕日またよし町はづれ
上役の交際費い金を溜め

古賀母草 (札幌川柳社、柳歴五年)
こたわりの妻へ妥協の語を飾り
紫煙まあるく今日の安堵を深く
吸う

小山内恵子 (小川柳社、柳歴十年)
肩車すれば親子に通うもの
晩年の夢をコソコソ踏むミシン

高村三平 (小川柳社、柳歴五年)
マスコミに便乗見る見る雄なベ
ン

マスコミのとりこに鏡ゆがみ出
す

小坂竜笑 (柳歴十年)
さりげなく言った言葉の裏表
ほほえみを蔑視と思う落日の日

池田竜歩 (柳歴五年)
現実に戻る米買う旅帰る
経験があるので強く叱りつけ

錦 俊坊 (柳歴五年)
血洗う音もせわしく妻へ秋
流行のスタイルを追う無神経

土田光江 (柳歴五年)
弱気の子叱って寡婦も泣きたい
日

そこまでは嫁に任せて置けぬ姑
中橋花泉 (柳歴十年)
栄転へ妬心も包むのし袋

本心を割れば相手も金がない
本谷美代子 (柳歴五年)
メロドラマだから悲劇が美しい

夜の勝負女豹花粉をまき散らし
工藤静観子 (柳歴十年)
断層のきしみ親子の社会観

がっしりと子を抱き上げたピッ
クだこ

佐々木虹夢 (柳歴五年)
つぎはぎの坑衣誰にもははから
ず

誕生日だったかすまんと猪口を

児島与呂志君

北川 春 巢

口答える子へババがにやにや
し
どん底の暮しいや味もよう云わ
ず

戦歴を酔えば語れる彼と飲み
気ぜわしい奴やと一人でバタバ
タし

忙ぎ妻の勝気のままの音
誇大妄想する男に成り下り
気にかかるとベンベン草もよう抜
かす

右は本誌第四〇〇号に載った彼
の自選句で、句風もよく出ている
と思う。彼は戦後作家とはいえ、
年令的にはもう四十に手が届くそ
うだ。本名を「好夫」という。

大阪の交通局に勤め、交通局川
柳会のメンバーである。再開され
た鶴町車庫は、以前あった
のが一時閉鎖になり、最近また再
開されたのであるが、ここには古
くから作家が多く、故関本雅幽
氏、故宮岡白峯氏、交通局は定年
で辞めたが、ベテランの加藤ラ
イト氏、現在活躍めざましい浜畑
胡蝶氏等等、そうそうたる先輩を
持っている。そのうち雅幽、白峯
両氏は、私自身も知らぬぐらいだ
から、もちろん彼は知る筈もない
が、それはどの名門の出である
というのを云いたいのである。

本誌第四〇二号に、彼自身筆を
執った「働く喜び」によれば、彼
が交通局に奉職したのは、復員後

一年半たってからだとのことだ
し、川柳をはじめたのはそれ以後
だとのこと。柳歴といえは約十年
という所か。随分苦勞もしたよう
に書いてあり、戦場の経験もあ
る。戦後作家といっても戦後派作
家ではない。

「戦歴を」の句などは、戦争を
経験せぬ作家には作れぬ句だが、
そうかといって、老人ぶった句は
ない。

「誇大妄想！」というような句
もあるが彼は考える詩人ではな
く、行動の柳人である。

夫婦の仲も至ってよいらしく、
奥さんの話をよく聞かせてくれ
る。子供の句も多い。

三浦春風楼君

高須 啞 三 味

恥知らぬ顔でサンシー買っ
て出る 与呂志

私は、現在所屬吟社を持ってい
ませんし、引揚げ後は勤務の都合
で余り句会にも出ず、不勉強でし
たが、一昨年隻腕を失ってから
は、特に句会に遠ざかり、限られ
た少数の柳話しか見ておりません
ので、現代作家のことをよく知
りません。まして戦後作家がな
うことになりましたと、年齢的な
関係もあって、ほとんど交際があ
りませんので、厳密な意味での
「戦後作家群中からの推薦」とは
言えないのでありますが、現在私
が注目している作家に青森市の三
浦春風楼という人があります。

三浦春風楼君は、青森県川柳社
(柳話「ねぶた」発行)の同人

で、本年三十三歳、父祖の家業
「南部せんべい」本舗を継いで、
日夜営々と家業に励みながら、僅
かの余暇を川柳に没頭するという
勤勉家で、その作風の生活に直結
して真面目な所に、私は瞶目して
いるのであります。

やすやすと今さら替える職
でなし
忙わしきは有難きもの苦を
忘れ

好きな道やれるを老いた父に謝
し
推敲の灯に取展す我がいのち
身についた言葉にものを教えら
れ

(昨年九月、祖母を喪なわる)
居る所に祖母なく秋の夜長なる
等々、クレン味なく地道に、自
己の生活を、身辺を、心境を詠う
ところ、今時の若い人にはちよい
と珍しく、いづれ着実な作風であ
ります。短詩界も、現代はコンテ
なる時代ですから、いろいろな目
につくでしょうし、従って誘惑(心理
的)も感じましょう。それをし
つとこらえて

「我が道を行
く」強さは、
東北人特有の
根(コン)強
さだ、と言っ
てしまえば、
それまでです
が、正しい認
識で、一見飛
躍のない、こ
の正統川柳

(この言葉に
は、いろいろ
議論があるよ

うですが、正しい系統の川柳とい
う意味にとつて)の道を、まっす
ぐに歩いて行こうとしている、こ
の未知の戦後作家に私は非常に好
意を持って、瞶目しているのであ
ります。

悩める作家
山田加勢夫

大野 風 柳

「瞶目される戦後作家を一人と
いうことになると実にむづかし
い。勢い小生の「柳都」からとな
るのは必然である。そこで私は柳
都同人の山田加勢夫氏をここに推
薦することにした。彼は川柳に手
を染めてわずか五年余りではな
いが、次に示す氏の作品を御覧に
なれば、柳歴というものが実にく
だらぬ肩書きであり、作品とは
その人の素質と努力によって、現
在においては昔の十年間の精進を
わずかに一、二年で成しとげること
も出来ると思うのである。

つまらぬ前置きは止めて彼の川

ビールは
アサヒ
ゴールド

柳を紹介しよう。

女医の齢など考えて軽い風邪

ここから彼の作品の基盤が出来はじめた。そして彼は悩み出したのである。あまりにもマンネリのはたまりの柳界の中で――

十二月一日越後の師走晴れ雪のない雪国なすことを知らず新人と居て体臭を感じないとむらいの家のあたりの雪よこ

遺族会皇居遙拝して泣かず新築へ寝て真夜中に笑い出しダム犠牲者へ経より高き蟬時雨冬眠の蛙病院臭を避け雪やこんこかわやへ立てば水も欲し

モニタージュ靴音のなき顔が出来なまじかな妻居て表彰もされず本に蚊がとまる読書にスギがな

物干の妻を秋のハチささず参加してビリ人間は出来つつも洗濯物しまう三輪車をしまう

★

布部 幸男

坂根寛哉（坂根久雄）

昭和7・9・30生。独身。母弟妹六人家族。京都地方簡易保険局内紅川柳会所属。平安川柳社同人。柳誌平安編集担当。

平凡というたのしさに負けるな

置きかえる構図あくまでひとりもの

男泣くときなり歩くほかになしトマト紅く愛を得し朝はじまり

ぬ ジェット機の下で強める二人像

などの例句をみても、素直に、川柳をつかんでいることがわかる。ことさらに「戦後派」を露出させないところ、させようとしな

ころに、根性をもっている。純情だともいえる。京生れの京育ちという環境が、そんな落ちつきに似たものを感じさせるのかもしれない。十二月の平安例会席上で見た。

朝の掃除小さき城を守るとき終電車どの顔もみな弱気なりの二句に心をひかれた。定型を守ることが旧いという観念を卒業しているのであろう。十七文字のどこかに戦後派の触角をのぞかせているのである。

川柳を作り、そして川柳とともにあるという川柳作家としての実践を、さらに「平安」編集担当の場でも実行している。忠実な川柳への使徒となっている。

一度つかんだものはどこまでも掘り下げてゆくという意欲と努力を作句の上で見せていることに、僕は瞞目しているのだが、独身というこの作家の立場が、こんごどんな風に展開をみせてゆくのか。それがたのしみであり、また懸念でもある。

型式の奇に眩惑されないこの作家の将来性を、現在瞞目される座に耐えているその実力に期待して

おきたいと思う。

沢山あります

岸本水府

私は沢山の作家に接していますので、その中の戦後作家の一人だけすいせんするのは、たやすいようでなかなかむづかしいのです。

一人だけを出すというのは、エチオピアのアベベのようにハダシで走って、二着以下を大きく切りはなすような作家があればよいのですが、それはなさそうです。つまりよい作家が沢山いるのです。

レベルのひとしいその中で、一人だけを出すのは、団体の代表をしている私としては、言いにくい点もあります。団体の代表でない人が、一団体、一誌の中で瞞目した人を押し出すのは楽です。

横浜川柳社「路」同人

滝沢誠太郎

中野 懷窓

誠太郎が川柳に手を染めたのが二十一年からと言うので正に戦後派である。尤も中学時代俳句見たいなものを一寸やった相だ。始め句会から入ったので純然たる伝統的作品をものしていたが数年前から創作に象徴的手法を多く見せる様になった。従って難解な句も往々作すが此頃流行の純詩的手法は好まない、だがいわゆる柳詩的川

柳にも飽き足らずと言う新しさと四五十年も経てば五十才になる旧さと入り交った句風を示し句会吟等には独特の異色が見ることがある。

通り雨 誰

かがだまされてる生活やがて夜明けとなるお面をつけろ

結論が出て歩く外ない勤め人善人の某日明日を唄いけり舌の赤さを書いてない名刺他人の涙の裏を見まいと下げる

嘘言いついて嘘美しくなる世間以上の作品には商人としての彼の気持もよく表わされているが推せん者たる僕の好みも交っている様でもある。

★

石原青竜刀

◎梅村曆郎 「天馬」同人 柳歴不詳、ただし、居住地岐阜で「人間像」に作品を発表（一九五六年頃より）一九六〇年個人ハガキ報「花火」発行、同年五月頃「天馬」加入。

作品例
人焦げし史話美しき二重橋
李ラインや真白き海図をクラゲ

各種毛織物卸



加賀繊維株式会社

大阪市東区南本町二丁目一番地

漂く
学生囚われ仮想敵国の麦ふくらむ

日本の奈落田園ひろげ祭笛靖国に帝國ねむる造花の下注目理由：独善的難解をもつて「詩の高さ」をはるかに見える短詩派革新川柳作者群の中にあって、よく僕たちの提唱する「諷詩」の一方とともいうべき、有識大衆の読んで解る、そしてかなりしっかりした批判精神の表現を見せているところ。

◎佐藤冬児 「諷詩人」同人 柳歴不詳、ただし、居住地小樽の柳誌「こなゆき」同人、「人民川柳」同人を経て、一九五九年「諷詩人」同人となる（「こなゆき」同人は継続）

作品例
流れ星ロケット通りをすれちがい
ロッキードとぶとぶロケットの掌のうち
戦争の残火を吹いて下駄はき平和
秋は親子つれで行こうよアメリカ

詠 近 舟 同

力のハシカ

新安保の立ち枯れ柳 人民銀座

注目理由：高い知性と批判精神をもちながらあえて短評派一流の詩的難解に走らず、川柳の正統をうけついで「諷刺」にまで発展せしめつつあるところ。

◎篠崎堅太郎 大宮市「ひかわ」同人、柳歴というほどのものもないまだ十代の学生。

作品例
親をこるすジャズは底ぬけに明るく
立ち上ると男である自衛隊の足並み

注目理由：この若い川柳作家がど

のように進んでゆくか。みぎ作例に見るようにスジがよいのである。

私のみた 成長株

三条東洋樹

私は常に、これから伸びる芽を持った人に、注意と興味を持つが、まだ充分伸びていない芽に対する私の夢は、株を買うのと同じようである。兎角狂い勝ちである。然し左記の人は、私の買った株の中の安定株であり、成長株であると信じている。

藤田紫石(神戸)
坂の荷を誰かたまって押ししてくれ
見舞う気の早や四五日を花が散る
主婦寄って話題はアパートの二

号
句歴十年、多作もしない、句会巡りに浮き足を立ててもしない、いつも同じようなベースで、熱があるでもなく、無いでもなく、しかもその句はソツがなく上品で信頼が出来る。柳壇の雑兵に成って走り廻らぬのは、医博と言う肩書きを持った職務柄とみたい。

小松原爽介(尼崎)

ストと花表裏に今朝も眼を通し
計報手にすべくなく襦をかき合わせ
金持の愚痴を励みとして帰る
(時)

作者の人物も真面目だが、作品に表れた精神の真摯さに、私は人一倍この作家を敬愛する。夜勤などもある勤めをしているので、この人も柳壇の交際場裡には顔を出さぬが、戦後多くの佳句を残した作家として、私の眼に映っている。

藤原鏡村(伊丹)
口あけて男に敵のない眠り
文化論果てずドブ川に放尿す
外人に似た秘書の鼻見ている
(時)

鋭いものを持っているこの作者の欠点は、過去に於て少しムラ気のあったことだが、家庭も安定した今日、これからのダッシュが期待される。現在三菱電機青蛙川柳会に新風を吹きこむ要点に立ち、句歴は六七年。若いだけに最も将来が期待される。

(註) 句の下は掲載誌。ふりふりうす、時日時の川柳

輪 転 機

須崎 豆 秋

二十八年夏の頃、本社句会へ生々庵氏に伴なわれて、いとも朗らかな女性に慧星の如く現われた。当時、五十才以上お召しになって居られたそうだが、三十才台にしか見えなかったこの麗人——これ

がわが社のベテラン山川阿茶さんでした。

川柳塔は毎月缺かきす、本社句会へも全出席の傍ら、杏林川柳会、金泥集、大万川柳等々と、その旺盛なる作句精力は実に、生々庵氏に「輪転機」と言うニックネームをつけられたほどはあると頭が下ります。

男みな阿茶に見えて売れ残り口ひげの生えて来そうな女史であり、還暦をすぎてもなぶりきく女赤着ての方がどうやら男らしいやぶへひになりそう并解やめにする

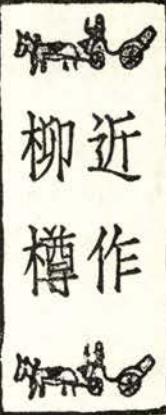
紅一点美しすぎて近よれず子が無うて学生さんの世話をやきお銚子を持つ仕事とは子に言わず不細工になっても昔のつもりで逆なでをされてるようなお世辞なり

大感が麻痺状態よく肥りお年を召してから、川柳に手を染められたので、世間の裏も表も知り尽し、人生を達観されているので、句にこそセコセとした小細工が無く、ユーモアもあって鷹揚です。

文学には、一葉、啄木、のような天才早熟型のある反面、近松のように、その名作品は作者の年令と反比例しつつ、若さを増して行くかに見えるものもあります。彼の「曾根崎心中」は五十一才、「お夏清十郎」は五十七才、「天網嶋」は六十八才の時の各作品です。

大阪市 麻生 霞乃
マニキエアー恋は爪からなのかしら
ウエントトウばかりの日記あじきなく
シオートエッセイとって日誌の日々あし
大新聞誤字のあるのも面白し
大阪市 橋本 緑雨
押すところを聞いて押してる旨判
晩酌の膝へ初孫あてがわれ
編棒の母の根気が見くびられ
ウインキーしなびたままで忘れられ
ライバルへせめて不遜を持ち続け
昼酒が汚職の匂いさせて来る
きもの着た娘に母の眼はなれない
酔っている妓に床の間押され気味
父ちゃんという笑顔なり皇太子
元氣な子風呂屋へ来ても叱られる
大阪市 石田 沐天
こんどめは此れを混ぜたるホームバー
要塞のような顔したビルが聳ち

七面鳥のような社長に疲れ果て
階段の手摺りつたってハイヒール
マンボとか称し車力の脚で来る
今治市 長野 文庫
じりじりと肩に食い込む防衛費
爺さんと婆さんだけの村となり
成長率とかで国民ごまかされ
わが家の生長率は国と逆
先ずお金持ちのご意見聞く政治
生活差益々聞く政府案
収入より物価の下る策ぞ欲し
和歌山市 秋 月 宏方
きょうも事故戦果のような大活字
明治大正昭和と生きて来た白髪
自衛隊勝って来るぞともういわず
みおつくしまだ宿題の出来ない子
新居浜市 月 原 宵明
鍵穴から見たかのように週刊誌
逢いびきへ地蔵横目を使いたし
菊人形とところどころが褪せて冬
月凄く陸軍上等兵照らし



麻生路郎選
北川春巢選

総選挙すめばスポーツ欄を追熊本市い 田口 麦彦

候補者を見飽きたころが投票日 同

ボスターの写真は雨の日も笑い 同

仕事には小心情事に意欲的 同

大物米援などと小物をあからさま 同

ケネディの笑顔がこわい兜町 同

当選の万才をして腰が伸び小松市 関戸宗太郎

金権候補から葉書だけ貰い 同

二人目は体温計もなく育ち 同

横綱の持病でそうな星になり 同

第三志望までも書かせて不採用 同

あぶく銭握った噂へまた出前 同

病み上りかくす化粧が厚くなり西宮市

不貞責める如くシーツの白が冴え 同

末沢 花美

白菊を活けて塵一つない小部屋 同

スイッチをつけたい程によく喋り 同

親馬鹿と見栄とが歩く七五三 同

今回は名を売るだけの立候補石川県 清野改め 高山 涼髪

まだ腹にいる子と玩具部をのぞき 同

バックシャンだったよ鼻が低姿勢 同

母と妻なかく俺を叱るなり 同

四五軒の部落にも貼る選挙ビラ 同

サン付でやくざの名前載っており秋田市 草深 酔舛

遊説は林檎の出来もほめて去に 同

新聞を読んでてすかさず席をとり 同

株少し上り月給あほらしく 同

百貨店特売日

粗品一つ貰って持てぬほどに買い 同

何をする人かベレーがよく似合い竹原市 杉原 愛鳩

十円のひよこへ綿の巣をつくり 同

落葉ふと不遇の友を思い出し 同

盗に自信があつて座を巡り 同

呉服屋に姪の縁談教えられ 同

ウエストがどうあろうとも秋の味兵庫県 辻 文平

恥ずかしき夜具山茶花へよ干す 同

謹賀新春

高峰 柳 児

長野県須坂市太子町

長野 文 庫

今治市港町八丁目

石田 沐 天

大阪市阿倍野区阪南

町西二ノ三三

山口県防府市大字西佐波

令字幸地一三一六ノ一六

長野 井 蛙

山田 季 賛

山田 ス ミ 子

広島県安佐郡可部町

大手寺公営住宅四号

丸尾 潮花

大阪市生野区中川町
二丁目三〇番地

林野 甦 光

呉市吉浦中町一丁目

工藤 甲 吉

青森市長島三ノ二

東奥日報社編集局内

月原 宵 明

新居浜市宮西町一一〇六

榎 紫 光

愛媛県周桑郡壬生川町大
曲り・富士紡水源神社宅



豊作へ病みいる妻の爪黒し	同	借金も信用として自責自慰	同
よくとおる声で弔辞の味気なし	同	耕耘機の調子を話題にする湯治	美称市 安平次弘道
赤い羽根助けて欲しいのはこちら	西宮市 樋口 寿栄	魚心あれば候補をゆするボス	同
貰い風呂洗濯出来ぬ湯が溢れ	同	七五三値踏みする目がかち合って	同
接待の今日の着物にまだ迷い	同	暴力のように流行のしかり	京都市 都倉 求女
教養と美人で若さは遠くなり	同	松茸は針止るまで八百屋待ち	同
予想屋の裏を行きたい日のスリル	岡山県 太田 義流	積み残す上に来い米 ^ミ ポスターが	同
出がらしを飲ませて聞かす立志伝	同	カナリヤの餌が給料前に切れ	出雲市 原 章二
早よ死 ^{にたい} 云い云い ^{たれ} 剤を飲み	同	名刺代払わぬうちに費い込み	同
じり貧のでこ入れ牛を市へ出し	同	クラクシヨン下に下という響き	同
海老色に夕陽が沈む窓が好き	大坂市 坂東千代美	葬式の後尾 幸福 そうな顔	玉野市 小谷 仙山
うばわれるまでに勇気が欲しかった	同	柿の数知らせて子等は皆違者	同
惚れ切ってうしろも前も振り向 ^が	同	高いんでしようと買う気の ^{ない} お客	同
女殺しなぞと云われておんながた	同	芸は身を助く盆栽一つ一つ減り	宇都市 平田 実男
審美眼猫もしきりに化粧する	鳥取県 鈴木村 諷子	連れて出るだけで喜ぶ妻になり	同
こんな虫までが二匹で住んでいる	同	テレビから読書の秋を奪われる	同
障子も破れ心も破れ	同	故郷の秋は落葉で風呂が沸き	愛媛県 竹田 青園
夜間部在学昼間は魚釣って居り	同	ネグリジエ男迷わす様に出来	同
人前で痴漢に遇った秋の蠅	青森県 木村 凉人	干布団扇の温みに似た温み	同
友釣りをする気か小銭置くお菰	同	プレゼントした靴下が逢いに来た	利根野市 板倉 天悟空
ドサ回り子等に貰った屑リンゴ	同	政見へ団地の窓がみな閉り	同

川柳雑誌社

鳥取支部

鳥取川柳会

一同

川柳雑誌社

にしなり支部

土井 文蝶 吾郷 玲人 本多 柳志 魚住 満潮 石倉 旅風 岸川 漣 欄 蘭 本多 清人 平沢 保美 中田 五色 中川 利男 福井 竜昭 宮原 敏子 伊集院 良晃 西川 晃志 後藤 梅志

大阪市西成区玉出新町
通一の一



モダン家具に敷かれ畳が泣いている

聞きつけぬ声が寝巻を慌てさせ 竹原市

矛盾をつけば若いなと云われ

つましく電化の中に住む母娘

声なき声でガフキ一の暴力 貝塚市

アドバルン力めどビルは頑として

後追うて死ねぬ薄情詫びて臥す

民主主義なぞと女はつけあがり 岡山県

財産と別に養子とはことわる気

遊ぶには惜しく働くには疲れ

贋紙幣が年期の指にひっかかり 見島市

人垣ヘキリンのような肩車

教科書でカバーしているマンガ本

国会解散一つのショーが終えし 大阪市

打ち明けるつもりダブで飲む若さ

人間を信じたくなる海の青さ

死んでから無趣味な花で埋められ 貝塚市

派手に別居してそつとよりもどし

取り込めて持って来た愚痴持ち帰り

演舌会拍手の数へ樂觀し 岡山県

十二月労基法など云うとれず

能率をあげるお酒で寝てしま

同

山内 静水

同

杉本 一鶴

同

同

杉本 たつよ

同

同

同

伊丹柳 瓢子

同

同

白石 良圭

同

同

護川 梢月

同

横山 一声

同

同

投票を済ませ見合いの髪を結い 兵庫県

勝てば官軍選挙違反はもみ消され

伯父と甥保守革新で睨み合い

餅買えぬ神の子がいる慈善鍋 大阪市

ハナハトの頭で世相割り切れず

河童欲情す月のきれいな夜

麦飯も楽には食えぬ物価高 堺市

法定伝染病の中へ入れどゴルフ熱

菊ずらりならべておいて農家留守 兵庫県

秋の夜のテレビへ長いコマーシ ミル

三日いた故里へ欠伸残して来 西宮市

いつの日か割勘でない仲になり

スカートもズボンも細くなるばかり 堺市

机に向うだけで親は安心し

雨蛙つけたまんまで花を売り 兵庫県

菊ほめて今日こそテレビ買 ミル

オパール指輪が玉の輿と見せ 笠岡市

コスモスの様な女の一人立ち

職場へのピリオット母にせかされる 芦屋市

胎教と美術鑑賞の供もし

真夜中の雨は農家をあわてさせ 山形県

石切りの音がこだまとなる紅葉

常岡 孝風

同

同

木村 草々

同

同

武田軍治郎

同

遠山 可住

同

藤田 一本歯

同

沢田 美喜

同

河原みのる

同

守屋 和子

同

三上 芙路

同

同

謹賀新春

川柳雑誌社 阿倍野支部

事務所 大阪市阿倍野区旭町2の110 電 06 2082 (木村十悟方)

坂東 若芽
伊達 堀子
不二田 一三夫
春田 鎮海
堀美 智子
今西 生薑
金井 文秋
片上 光福
加藤 繁雄
河井 庸佑
木口 賀峰
木村 十悟
菊沢 小松園
久米 奈良子
松江 梅里
小川 恒明
坂上 山椒坊
清水 義介
新川 博也
須崎 豆秋
高鷺 亜鈍
辻川 喜仙
山本 葉光

(ABC順)

須崎 豆秋

大阪市阿倍野区旭町
三丁目一四番地



二人なら時には好いと日曜百姓 笠岡市

守屋衣里子

家庭不和子のままごとに発見し

同

美容院マダムも留守の農繁期

同

減税の皮算用で買うときめ

同 齊藤たけお

滞日十年おとどっこいなどこ 芦屋市

里田一ン十

胃袋に問うておさつをつたべ

同

弔辞読む為モーニング上京す

同

秀才は案外妻に敷かれて居

同 松高 秀峰

落選の悲報へだるま見下げてい 奈良市

同 内海 敬太

柿と栗植えて楽しい文化の日

同

停車場の時計もろとも秋になり

同

三月ほど嫁誉められることばかり

同 土守 蜻蛉

おばあちゃんの票へ手を貸し足を貸し 羽曳野市

同 見本 泉洋

篤農表彰羽織の襟を折ってやり

同

髪結うてもう正月の笑い声

同

離婚したことにして病む医療扶助

同 木下 一休

昨日喧嘩今朝はハミング隣から 香川県

同 三井 酔夢

病名は軍医がつけたままでよし

同

命まで賭けた女は子にひかれ

同

淋しきにおそろわれ猿を見にゆきし

同 渡辺 乱坊

夫婦仲良いので植木青々と大阪市

同 福井 竜昭

火鉢熱くし明日の夢語り合い

同

花嫁へ怒濤のように女寄り

同

平凡に生きて一年の短かさよ

同 神田 豊年

幹事とはいいな美人と握手する 大阪市

同 西本 保夫

稲刈りがとっても楽し夕焼ける

同

五年目の妻に時計を買うプラン

同

宿帳へ無職と書いた太い指

同 藤本 星二

参観日着物履物家が採め 愛媛県

同 鳥井 川鳥

賽銭をバケツで運ぶいい景気

同

観光へ蜜柑も汗も見てもらい

同

聞き耳を立てたら何でもなし話

同 若柳花乃子

豊作へ米代狙うものばかり 松江市

同 田中 妖人

スローモーションで見せる新記録

同

掌をもれる砂さえ秋の音

同

思い出のデイトの道をデモで練り

同 藤本 晴暉

ボーナスの出る日にきまぐれ料理 大阪市

同 藤富 淀月

地下足袋の方が手錠の端をもち

同

新しい紙幣屋台で怪しまれ

同

鉢巻をせねば社長と斗えず

同 西浜 青路

主婦の座の復活信じ療養所 出雲市

同 板倉 白楊

ボーナスも昇給もない療の暮れ

同

大鉄局・天鉄局支部

永尾 丸川 辻村 植村 吉原 阿万 都倉 正江 大脇 保岡 松宮
初永 白溪 客遊 紅月 万女 秋太 笑岳 笛生 的

謹賀新年

西尾 栞

大阪市南区西堀町三〇
電話五九六三番

大阪逓信病院

烏ヶ辻川柳会
(イロハ順)

池戸桃村 会長 若林草右
市場漫食子 中谷ハナ子
生越正徳 幹事 榎本露路
乾 静夫 幹事 真野康彦
橋本幸男 幹事 小沢史葉
半田夏生 足立春雄
長谷川鬼風 木村喜男
西口 弘 北川春葉
西辻竹青 水谷竹莊
小野木凡平 幹事 森下愛論



形勢悪い方が甚盤へかがみ込み 岡山県

呑んだ時云うなと不満押えとき

コロッケでお昼をすませ夜の蝶 宮城県

自家用車あって定休厳守する

妻小言云わなくなつて菊見事 加賀市

医のストへ病気がストをしてく 笠岡市

お付き合い女房にかじはまかせ 京都府

友が来て興ずる妻の未だ若し 八戸市

稲扱機夫婦二人の天と地に 泉大津市

別嬪を残し幹事は飲み直し 神戸市

ただもらいできぬと投票してし 小松市

カフスポタンやたらと上着脱いで 大阪市

ふるまいの酒でわが足とられて米 河内長野市

女子大出夏布団さえよう縫わず 和泉市

真直ぐに帰れば夕餉出来てい 大阪府

忠告が病気になつてからわかり 布施市

ゴミの市女性を意識せず扱 伊丹市

ふところの金見抜かれた夜の女難 宮崎市

昇給の額が歯がゆい物価高 大阪市

録音の子守り歌でも児は無心 茨木市

福田 祥男

同

平野 光道

同

杉浦 酔羊

谷本鈍愚坊

塚脇 笑太

狹守 和穂

高津 紡毛

吉田 隆史

月田北海坊

北村弥次呂

森本黒天子

末田 晃康

佐伯 九紫

片上 光福

小川静観堂

野口卯之助

本村 文福

高木繁太郎

抱き上げた膝いっぱいに見の温み 大阪市

大晦日禪に足らぬ金は有り 京都市

絵看板スードの肌も冬の色 大阪府

馬子唄にそば喰い残し小諸たつ 大阪市

今年こそと云えば女房が初笑い 須崎市

口紅をつけ忘れたる顔で生き 五所川原市

豊作を半分喰った肥料代 島根県

煙吐く汽車見にこいと田舎から 布施市

子がないかざくろはこぼれ柿は 笠岡市

家系図がほしいと思うほど出世 鈴鹿市

注射禍の熱へ町から見舞が来 玉島市

どの科でも診る器用さが危ぶまれ 豊中市

キスシーン見つめる目とそ 西宮市

ストなんぞ知らず働く蟻の国 大阪市

二人連れチップに女中気をきかせ 鳥取県

失業保険只やる様に怖い顔 大阪府

苦しさを忘れる恋の頃がよし 八尾市

そつくりの顔が散歩へブルを連れ 東京都

旅仕度というほどないにうろう 大阪府

十一月ハワイの夏はまだ深し ハワイ

竹内花代子

大久保 和二郎

橋本 裕邦

井石 悟朗

高橋 蟠蛇

盛 竜蔵

星野 侑正

坂上山椒坊

佐内 隆文

吉田 俊和

井上 旭峯

土井 北桐

鵜飼 鮎子

山田 蛙水

谷 無閑

山田松太郎

吉田 博一

豊田 稔坊

中岸 雄水

並木東田楼

謹 賀 新 春

・ 謹 賀 新 年 ・

川 雜 玉 造 支 部 一 同

あけまして
おめでとうございます

川 雜 玉 造 支 部

栄 子
一 清
出 田
西 酒

金 泉 萬 楽

大阪市東淀川区淡
路本町二ノ六八九

課題と選者

——「にしなり」年刊句集に触れて——

高 鷲 亜 鈍



西成支部句集の草稿が届けられた。句集批評をしるというのである。支部句集では、さきに明和支部から「明和」句集が指導者西尾栗氏の序文で上梓された。潮花、紫香、水客の「三人」句集が出たが一年二年経っても私はその儘にしている。百把一からの句評など三名以上のアンソロジイでは、その句主の人間性にまで深く追求できず、作品だけに限られて上り下りしてしまう。甲の作句態度を是とし乙の作句態度を非と決めることは、一冊の句集批評にはならないなどと考えると、簡単にペンには持てないのである。

現在、川柳支部では明和支部と西成支部が一番活躍していると言え。立派に活字出版をするのも、この二支部で、それぞれ会員達が積極的に参加しているのも他に類をみない。たとえ月例会の集積にしろ、昨年と今年とついで年刊句集を出して一年間の句業をしめくり、不用意に踏んだ足跡を各自で振り返り、次年度への精進を希う西成支部の会員達の情熱は高く買われていいように思われる。

課題吟に就ては、さきに直原七面山氏の否定説があり、清水白柳氏の肯定説が本誌に掲載された記憶がある。その両氏の論拠とするところが私はいま反芻する余裕はないが、川柳界には大なり小なりの句会というものが附きもので、句会では兼題、席題の課題が与えられ、選者（互選の場合もある）がイニシヤチブをとる。故に句会の作品は課題に制約され、そのうえ選者の決定権で作者の自由は束縛され、雑詠精神にあるクリエーチブは望めないと普通考えがちである。

この場合、句主の自由性とか創造性につながる作者の個性は、試験勉強のヤマが当たってすらすら答案が書けるように、びったり課題を解くことができれば、課題を建てまゝとする句会吟でも、雑詠精神と何ら変らない自由と創造のビビッドな詩川柳を生むことになるであろう。又自由吟（雑詠精神）が日常の記録をとるとしても、詩

川柳が標榜する、自由と創造の精神を内部に持たない限りは、結局与えられた課題に隷属する無個性作品になる。本来が川柳の対象とする現実とは、視覚で捉えうるもので、具体的なものである。川柳は課題の有無に拘らず、既に現実という広義の課題が附与されているものと言えよう。われわれが「川柳塔」や「近作柳樹」の雑詠欄に投句するにしても、課題はなくとも、作句者は、勝手に課題をさきに設定しはしないか。たとえそれが思いつきであつても、テーマは外部から拾って川柳を作るのである。テーマとは川柳の場合は課題

待ってから、徐ろに明るみへ出すことである。即ち課題（テーマ）を主題（モチーフ）にすること……個性をもった句、生命ある句とは、そういった作句態度から創作されるものである。

一体、選者という鑑札は何処の誰が出すのであろうか。柳歴三十五年とか、それほどの柳歴がなくとも二、三頁のがり版の刷物を出す編集発行兼主宰者とか、川柳が御上手であるから、多少理屈をこねるから、金があるから、凡そ文学の尺度を計るに何の関係もない営利を目的にしたK・K社長、市、府議員程度の下っ端政治家、官吏、医博ETC、のちよっくら社会的地位を占めているから、おそれもなく川柳の良悪を裁く選者を推薦する愚かな川柳界には、それだけで愛想がつきまわさうものである。それら文学としての川柳に何のつながりもない人達は別に、現在自他共に許す大家、中堅の所謂川柳人として一般に知られ、川柳以外の職業、生活などに支えられていない川柳プロに絞って、果して現代川柳に對する正しい認識をもつ選者が幾人居るのか。今のところ一人二人と指を折って、とても五本の指まで数えられない現状である。

句会へ、少し珍しい顔が出席する。とたんに、句箋の束をその方へ押しやる。並居る柳歴五十年の

清 酒



灘・魚崎
大塚合名会社釀

南海電気鐵道株式会社

川柳部一同

川柳大聖寺支部
加賀市大聖寺水町四八
野村 味平

川柳雜誌社

浜寺支部一同

本年は郵送機関の
混雑を察して年賀は
欠礼いたします

大家だろが、有名無名を問わずに柳歴のへつたくれもない、一丁の自由吟すら書かない亜鈍のようなゴロツキの審判の座にさえ立つ、という妙チキリンな現象がたびたび起るのが川柳だけに許された句会である。それなら、てまへは選者を辞退したら可いだらうとは、折角の善意でも歓待してくれた二、三の句会係りから呶鳴りつけられるかわからない。御尤もな言仰せであるが、わたしだっていつとき先輩、大家の作品を手玉にとってそこはかの優越感をもみたいし、わたしの希う時川柳を発見したい。或は一題でも選者の目をのがれて確雲に自分の句が軸として残るものであれば、全没だけは助かるというものである。

それなら、てまへはなぜ、選者を前にして句箋を握るんだネ、と詰問されるまゝに、何故わたしは時折り句会へ顔を出すか、という理由は当誌四月号の「川柳の座」拙稿を御査読願うとして、同一課題に集中して競争のスリルを味えるというゲームの慰しさのうちに、技術を練磨するということはいかなるスポーツ、芸術の世界にも必要事であらう。こんな時にわたしの方からみる選者とは、単なる審判者である。芸術の世界で白・黒を決める裁判官みたいに、入・得を一瞬のうちに決める選者など、たとえ川柳界にあつても有り得べきものではない。裁判にさえ検事の論告があれば、弁護士弁

論もあって、一審二審から大審院まで何年もかかって持ち込むことが出来るのに、川柳誌といえは自由吟にさえ○○選となっていて、それは必ずしも自由吟でなく選者という權威に圧倒され弁護も立てられず黙って被告席に立たされて、何が自由吟かと問いたいのである。

結局選者とは誌上に於ては否定し、句会場に於ては存在し得るといふのがわたしの持論である。それは句会とは技を競う道場であれば、川柳ルールの違反をとがめ、課題というゴールに飛び込む先、後を見極め、正確に的を射抜いたか、どうかを判定するジャッジメントとしての選者をわたしは認めるのだ。この場合、選者に色があつてはならない。選者は無色透明公平無私な態度で、所屬する政党から離脱した衆議院議長のように、一段高いところの中央に位置をとつて中立のペルを振るようなものだ。

選句とは批評であると云われる。然り、その通りであるが、この批評は川柳という川柳性から考へたら、誰が聞いても、誰が評しても成程と納得できるものでなければならぬ。選に佳、客、三光を決めることの功罪は別に述べるとしても、よし三光、五客が選者が定めたとして、それが披露に聴き入る会衆も成程、天は天、地は地人は人といちいち領き得るものでなければならぬ筈であるが、

そこまで選句に等級を決めた選者に成功したためしがない。そこが、スポーツと芸事の相違があって、川柳たりとも、小刻みに句の評価を定めるのは、芸術を無視して、徒らにパチンコ心理を狙う、射倖



的なゲームとしての興味の対象に置くことだ。これは文学としての川柳に無知な玉突のゲーム取りみたいでお客様に色目を使う選者である。こういう選者にはわれわれは結束してサボタージュをやることだ。

女房も亦名選なりと言いたい。さきにわたしは、川柳上の課題とは視覚が捉える現実でなければならぬという意味のことを述べた。誰でも分る川柳とは、そのリアルを基底にして、内部に主体性を置くことによって、自由と創造の詩川柳が存在するとも云った。しかし、現実でも、超現実というのが、前衛派の提出する川柳実験であるが、選者が如何に公平無私といつても、斯のような非現実的超現実を規範とする川柳は、古川柳の概念をもつた死川柳と同様、受け容れる可きものではない。

選者は現在に位置し、現実に息する所謂現代川柳を見極めるためには、先ず現代意識を持たなければ選者の資格はないと言つてもよい。

さてわたしは、今回の年刊「にしなり」句集を読んで如上のようなさまざまな問題が雲のように湧きあがり、なかなか句集評にまで筆が進まないのである。しかしこのままを擱いたのでは、期待して下さった西成支部の人達に言いわけがたない。

月例句会の句を各人が集め、その上自選したものであらうが、各自の出句数がマチマチである。それは月例句会の出句数に比例されるが、入選度数が物を云っているようでもある。しかも出句の少ない人より多い人に佳句が多いのはどう

謹賀新春

川柳雜誌社松江支部

梔 谷 冬 生

松江市雜賀町

舟木与根一
松江市西忌部町

松江市西忌部町

交通局川柳会

橋草前山藤森米岡福兄浜富北
本深田口田虫島島島畑岡川
雅醉雅凡文一の孤正呂胡淡春
巢舛浩万々夫字舟則志蝶舟巢

川柳雑誌社ハワイ支部

ウイロー社

同 人 一 同

うしたことだろうか。多作家必ずしも名作家と云えず算作家に名作の出る例も往々にしてあるが、ここに蒐録されたものではアンパジン形式が採られている。課題がなく、選者名が消されてあって、各自の雑詠(自由吟)のようにとれるが、しかし共通の課題とか主題が発見され、そして一人の句主に集計されると、梅志は梅志の顔になり、晃は晃の顔になってゐるのは不思議である。しかもその顔の輪廓は出句数の少い人よりも多い人ほどはつきりしている。

先月の十六日(日)、わたしは小雨降る秋の宵口を著流しの袖に含まして梅志居を訪ねた。創立三周年記念のしなり句会当日だったのである。地下鉄玉出と聞いてきただけでは捜しあぐねる時間も用意して自宅を出たつもりが、既に定刻を一時間は過ぎていた。千客万来で三十人を超えてゐるかと思われ、実に盛会であった。わたしは今、この句集に参加した顔振れをみると、当夜出席した全員の顔である。まだ当夜顔をみせなかった「明和」のグループ他数氏の顔が加わっている。只一回だけの句会に出席して感じた印象はこの句集を素読した印象と大体に於て一致している。それは、にしなりのシギュラーメンバーに川津関係の多数応援があったこと。それから西成区地域に住む他誌の柳人達が随時参加していることなど、むしろ支部句会という狭

い範囲でなく、にしなり地域句会であり、その意味での句集であった。

但しシギュラーと考えられる満湖、梅志、旅風、晃、柳志、保美、欄蘭は不朽洞会員であり、前理事長、文蝶の存在などまさしく川津支部の句会であり句集である。何故なら結局、そういった人達の出句が多く、シギュラーだけで充分に圧倒しているからである。敏子、漣、利男の三氏の作品を初めて拝詠したが、前記のベテラン諸氏に見劣りするものではない。白柳、水客の不朽洞上位から、薫風子、すむ、普風、の中堅「明和」トリオの参加が目立つ。

「玉むし」以来の葉平氏がこ

福寿司

心斎橋筋大丸前

電話の三三四四番

カム・バックしており、塊人、太路、六竜子、天真など柳界きつてのサムライの顔もあるが、ちらっと覗く程度だ。最後に私が特筆したいのは梅志氏のお孫さんにあたる慎太郎少年の句である。

かあちゃんのうしろをそつと市場まで貧乏神なんて神様いるのかなあ

どろ沼にキラッと一とすじの光

の句を拾ってみて暗若するものがあった。今回のにしなり句集はこの慎太郎君の珠玉をかちえて一層光彩を放つであらう。

一九六〇・一一



現代柳人録

- (一) 姓名(二) 雅号(三) 別号
- (四) 現住所(五) 生年月日(六) 出生地(七) 職業(八) 電話(九) 自信の句一句(一〇) 川柳以外の趣味(一一) 配偶者の有無(一二) 川柳に手を染めた年月

(45) 川村 伊知 呂

かわむらいちろう

(一) 川村 一郎 (二) 伊知 呂

(三) 無精庵(四) 大阪市南区北

桃谷町七一(五) 明治39年3月27

日(六) 大阪市北区(七) 医師

(医学博士)(八) 南西八四七三

(九) 御無沙汰の方がよろしい聴

診器(一〇) 絵画随筆(一一) 有

(一二) 昭和四年頃、本格的には

じめたのは昭和十四年頃。

(46) 山田 祥 園

やまたしやういち (一) 山田 庄一 (二) 祥園

(三) 有町(四) 愛知県大山市松

本町三四〇(五) 明治38年9月20

日生(六) 現住所に同じ(七) 朝

日新聞専売店(八) 大山八五〇

(九) 金持ちになれとは言わぬお

父さん(一〇) 日本舞踊(一一)

有(一二) 昭和十年一月。

(47) 北川 春 巢

きたがわつお (一) 北川 隆男 (二) 春巢 (三)

なし(四) 大阪市旭区大宮西ノ町

八の五七(五) 大正2年4月28日

生(六) 広島県豊田郡豊田町御手

洗(七) 医師(八) なし(九) ケ

ーブルの一番前に立つ若さ(一〇)

観劇、観能(一一) 有(一二) 昭

和九年十二月。

(48) 中野 懷 窓

なかのたけどう (一) 中野 竹蔵 (二) 懷窓 (三)

唐琴亭主人(四) 横浜市南区中

村町四の二七八(五) 明治29年9

月11日(六) 岡山県邑久郡午窓町

(七) なし(八) — (九) 能面

のたれかに似てて無表情(一〇)

謡曲、絵画(但し見るだけ)(一一)

(一二) なし(一二) 大正二年。

(担当・西川 晃)

支 部	京 都	社 誌	柳	川
全	大宮市西入	全	全	全
井ノ下晴芽	大久保和三郎	田中千潮	田中鳥雀	平井絵丘
井ノ下秀徒	大鶴喜由	竹松九角	小林亀一	平岩司郎
岩崎正夫				本儀親生
深草義典				
全				
西川 晃				
TEL 〇五九〇				



中將姫

富士野鞍馬

雲雀山

中將姫は、藤原豊成の娘で、光明皇后の姪にあたり、孝謙女帝とは従妹ということになる。美人系であったから美しかったと想像できる。没年から逆算すると、天平十九年（七四九）奈良の大仏鑄造の年に生れたことになる。

幼いころから継母に虐待されて、大和の国境雲雀山に棄てられ殺されようとした時、阿弥陀如来が出現して救われた。という説話もあり、謡曲「雲雀山」では、三年ほど山に居て、侍従という乳母に奈良へ連れ帰られることになっている。それらを川柳も見逃してはいない。

思ふさま振って雲雀山へ捨て
（万 天二）
思入れに泣かせて雲雀山へ捨て
（タル五七）
恵だらけな雲雀山へ捨て
（傍 三）

継母のさえずりで姫は雲雀山
（タル九一）

雲雀山空さいずりの継母沙汰
（〃 九三）

昼の鶴故住み給ふ雲雀山
（〃 一二〇）

雲井から落ちて音をなく雲雀山
（〃 一〇四）

ママしきをノリの元手の雲雀山
（〃 一〇六）

雲雀山木樵びつくり眉に唾
（〃 一四四）

あまり美しいので狐かと思
ったかも知れない。

赤本で見てもなせる雲雀山
（タル一一九）

草艸紙にも書かれていたよ
うである。また和讃にもよく
唱えられた。

当麻寺

はえた年中將姫は尼になり
（タル二五）

姫は、無常を感じて十六才
の時、天平宝字六年（七六二）
尼になって、大和の当麻寺に

入って修業した。「十三ぱっ
かり毛十六」というから「は
えた年」と川柳は洒落てい
る。

当麻寺の近くの石光寺に
は、姫が十七才の時、蓮の糸
をこの井戸の水で洗ったら
五色に染まったという「染の
井」があり、その糸を掛けた
という「糸掛桜」の古木が、
現在も残っている。

蓮池は中將姫の綿屋
（タル八四）

蓮の糸たなびく雲の当麻寺
（〃 六四・七八）

その蓮の糸で曼陀羅を織っ
て、御徳を積んだといわれて
いる。曼陀羅（まんだら）と
いうのは、浄土実相の絵であ
る。それで「たなびく雲」で
ある。

一筋の心から出る蓮の糸
（タル一四七）

内心も菩薩で織った蓮の糸
（〃 八六）

まんたらの御氣根にんに当
麻寺
（〃 六七）

糸も妙蓮の曼陀羅法加減
（〃 一一七）

と、仏道一心にマンダラを織
ったが、

弱さうなものを中將姫は織り
（万 天八）

西陣の手際に織れぬ蓮の糸
（タル二八）

織ものの綾もわからぬ蓮の糸
（〃 七三）

呉服屋に無いのをがむ当麻
寺
（〃 二二・七三）
など川柳はうがっている。
そしてまた、

当麻寺機のみをよこしに
し
（拾 三）
蓮根をかてにして喰ふ中將姫
（万 明元）

糸をとったあとの蓮根をゴ
マヨゴシにでもして食べただ
ろうと作っている。

謡曲「当麻」では、終りに
「さてはこの願成就して、正
身の弥陀如来、実に来迎の時
節よと、感涙肝に銘じつつ、
綺羅衣の御袖も、しをるばか
りに見え給ふ」とあるので、
どなただと中將姫はまほしが
り
（タル九）

当麻寺聞きはれのする名が残
り
（拾 三）

と詠まれ、当麻寺は今に名高
く、しかしその曼陀羅という
のは見られない。

そして中將姫は宝龜六年
（七七五）三月十四日、二十
九才で入寂といわれている。

曼陀羅と唐衣

蓮でまんだら杜若ではころも
（タル五三）

という川柳があるが、「蓮で
まんだら」は中將姫で、「杜
若ではころも」というのは、
在原の業平が、東下りの途、
三河の八ッ橋で、その杜若
で、か、き、つ、ば、た、の

五文字を折り込んで、
からころも

きつつなれにし
つましあれば
はるばるきぬる
たびをしそおもふ

という和歌一首を詠んだ。そ
れをいったものである。どち
らも「おる」というのにつけ
た趣向の句である。なお類作
に、
古いおりもの蓮の糸かきつば
た
（タル八二）

姫は蓮公家は杜若をおつて見
せ
（〃 六七）

男女の中將水草をおり残し
（〃 一五九）

などがあり、業平は公家であ
り、右近衛中將であった。
これはまた別なことに附会
して、
仲条姫のやうなのがよろしに
くる
（傍 初）

と、姫姫中絶医者、仲条へ、
きれいながよろしにくる。
と戯作している。

謹賀新春	
美草流朗詠舞踊研究会	大 高 角 嵐
大阪市住吉区西長居町一	秋 月 宏 方
二八	和歌山市今福東ノ町
橋本写真材料商	西之町八三
大阪府東住吉区平野	

②は、現今でも殆どの家が昔からの風習として実行しているようである。元日は箆を持たない。つまり掃除はしないという意味。

③は、せめて三日だけでも、ゆっくりと身体を休めて、寝ていたいと思うているのに、一人一人の回礼の挨拶を受けに立つのが面倒というもの。

①初刷は礼服を着たままで読み
半文銭

②ほんのりと白むと初荷急ぎ出し
当百

③新年に消炭を吹く合宿所
小寒郎

④歌留多会押さへた上へ櫛が落ち
浅峰

⑤正月は食って笑って寝て仕舞い
江東庵

などがある。五十年後の昭和の今日でも、別に変った世相は見出せないが、ただ③の「初荷」は明治末期から大正中期へかけての頃のように盛んでないらしい。

④の句は日本髪の新らしい今日から見て、明治色の豊かな句と言える。

大正時代の句では――

①元日は国旗を出したままで
文久

閉め

②指先でへこまして見る鏡餅
卯木

③加留多会火鉢抱えたのは読

手
④ お休みを振って蜜柑の皮を
むき 千年生
⑤ 借金があるとは見えぬ松飾
り 不撓子
① は、何でもない句であるが、軽
味と写実に妙味のある句として、
柳界から当時賞賛されたものであ
る。
② は、古川柳や江戸文学の研究家
として有名な今井卯木の句で、横
浜太田町の実家で斗病していられ
た頃の句。

とがよく連想されている。

⑤は、門松の立派なのに対比しての皮肉であり、諷刺である。

大正時代の句としては別に特色がある訳ではないが、併し現今の感覚から見て、やはり何となく表現が古いようにも思われる。

さて、昭和の句では――

①歌留多会今年は妻としての
位置 火呂志

②女湯も元日という桶の音
敏行

③元日の朝も救急車は走る
機司

④追羽根へ今度は髪ぬいで来
波面

⑤三カ日担ぎ屋の娘にして置
武雄

かず

①は、昨年の正月の歌留多会で見初められた娘が今年の歌留多会へ夫婦然として来ている陸まじい情景。

②は、桶の音の響きに依って銭湯の静かさをよく現出しているもの。

③は、元日というのに交通事故の発生であろうか？ 世は正に交通地獄である。

④は、振り袖姿の追羽根。負けた悔しさから日本髪のを家へ脱ぎに帰って再び挑戦に出て来たと言いう風景。

⑤は、どこの娘さんかと思うたら、それが意外にも、いつも列車で米を担いでいる娘さんであったという着想のもの。

尼	綠之助	出雲市高松	川雜米子支部	松露川柳会	米子市富士見町一三五小西方	河相すゝむ	西宮市川東町一〇九 電話西宮③〇七六七	田村 緑朗(藤波)	岡山県英田郡美作町 湯郷五五一	江国 幽谷	武部 香林	武部 若菜	山 浜田久米雄	岡 林 葵丘	川 雜 宗高矢寸志 光好陽子 外一同	高 橋 蟬蛇	高知県須崎市吾桑小浜	杉 谷 湖山	鳥取市職人町	倉吉川柳会	倉吉市生竹(大前鳴悦方)	川柳雜誌社	木次支部
---	-----	-------	--------	-------	---------------	-------	------------------------	-----------	--------------------	-------	-------	-------	---------	--------	--------------------------	--------	------------	--------	--------	-------	--------------	-------	------

作品展

後援・大阪市教育委員会

写真説明―(上)会場入口・(中)麻生路郎夫妻・(下)いろは川柳屏風

大阪市民文化祭行事の掉尾を飾る関西短詩文学連盟主催、大阪市教育委員会後援の第四回短詩文学作品展は十一月二十四日から二十九日までの六日間、梅田阪神百貨店丸善画廊で開催された。詩・短歌・俳句・川柳各部門の大家・新鋭七十余名の新揮毫作品二百余点が広い会場に目白押しに展覧される。会場は大阪駅前百貨店の画廊であり、午前

十一時から午後八時までの開場時間は鑑賞者の絶え間がない。来年度の廿年に備えて早くも牛のプロンズ像が飾られ、重厚な雰囲気醸成している会場入口には、麻生路郎理事長が「第四回短詩文学作品展」と達筆を揮われた額。正面中央には麻生路郎の「俺に似よ俺に似るなど子をおもい」「横額」をはじめ、小野十三郎(詩)、安田青風(短歌)、神田南畝(俳句)の各部門のおきき作品や本連盟名誉会員藤沢恒夫氏、生田花朝女史等の逸品(色紙)が展示され、そ

の左右に中島生々庵氏の風呂先や松江梅里氏の二枚折屏風(一双)にいろはの頭文字による自己の力作川柳短冊を貼ったものを出品して鑑賞者の目を躍らせる。川柳部門の作品展への熱は特筆大書すべきもので、豊乃女史が会期の六日間に欠かさず会場に詰められ、各方面への心使い、来会者への接待などに当られた事でも判る。二日目は東京から福富雷童画伯、最近バリから帰阪された山口倫子女史等が相次いで参観され、豊乃女史が路郎理事長の出先へ電話連絡



一 創刊号から
四百号まで一



★ 輝 や く 巨 歩 (5) ★

昭和二十七年

一月号から定価四十円に改正
川維青年部生る 三月九日世話
人会発足。

本社千日前連絡所搬止 二月二十六日

川維柳談会開設 四月二十七日
創刊三百号記念五月特集号
五月一日発行。

路郎主幹観光静岡全国川柳大会
へ出席。五月十一日

壺坂寺吟行 六月二十二日
本社句会会場下寺町光明寺へ移

転
物故川柳人慰霊句会。十一月一日
光明寺で。

不朽洞会役員新陣容決定。十月
四日理事長中島生々庵、副理事長
武部香林、村松夢裡。

昭和二十八年
路郎主幹夫妻は一月四日から美

川 雑 淀 川 支 部

大阪市東淀川区十一
八条町一丁目

武部若菜	武部香林	客員	木村水堂	種谷敏明	綿谷永香	木下涼秀	松下灯子	小島さぎす	平田三十郎	早川清生	志水礼司	坂田東洋男	西森花村
------	------	----	------	------	------	------	------	-------	-------	------	------	-------	------

西 いわを

大阪市東住吉区桑津町
七ノ二二

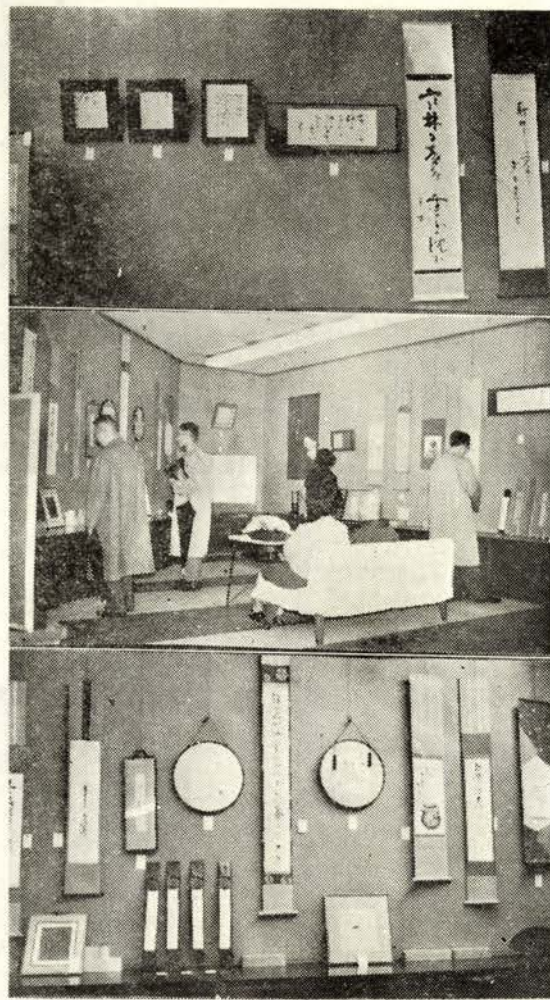
謹 賀 新 春

第四回 短詩文学

主催・関西短詩文学盟

されるてんでこ舞
ことであつた。
其他詩部門の港野嘉代子女史の
異色ある作品、俳句部門の岡本主
最年長の麻生路郎
氏から最年少、二
十一才の林夢虹氏
清水焼への俳句、若田秋窓、岡田
指月、永尾大露氏等の力作が目白
押しに展覧され、短歌部門では安
田青風、安田章生親子が仲よくな
らび高原弦太郎氏は安江不空張り
の面に、その持ち味の短歌を見せ
は、中島小石、山川阿茶、西出一
栄、久米参良子の女流作家が、腹
乃女史に続けとばかり出品された
に報ずるには誌面がないので省略

写真説明—暗示された作品の一面と場内風景



することとした。

かくして、短詩型文学に生きる
人々が、時にはお互いの世界から
脱して他の分野を覗き、その空気に
触れ、その人に接し、大いに愉
快に交歓しようという本連盟の趣
意が十二分に達成されたことを思
うと、今後ますます精進を続けら
れんことを祈って筆を擱く。

(三五、一一、三〇)

川柳部主事 橋高薫風子
カメラ 河相すゑむ

作の旅へ。

路郎先生川柳生活五十年記念短
冊展。三月三日から十五日までア
ベノ近鉄百貨店七階で開催。不朽
洞会主催。

人間横丁 五月号から連載、東
野大八氏執筆。

路郎主幹赤坂町誕生祝賀川柳大
会へ出席。

暗峠から生駒山上まで吟行(六
月)

大西野介近く 七月十三日
路郎主幹岡山県湯郷温泉納涼川
柳大会へ出席。八月十六日

中島鉄州近く 八月二十日
選者制の更正 九月

新川柳鑑賞 十月号から掲載、
路郎主幹執筆。

平清盛 歴史物シリーズ十月号
から連載、富士野鞍馬氏執筆。

昭和二十九年

村松夢程近く 二月五日
副主幹制を制定 初代副主幹に
福田山雨楼選任。二月一日

北川春果近作柳欄欄選者に 七
月号から路郎主幹との共選。

第一回川柳川柳まつり 七月十
日下寺町大覚寺で開催。課題吟最
優秀句の作者梶原一善路郎賞を獲
得、倉敷支部に優勝杯を贈呈。

(以後省略)

路郎主幹川柳生活五十年記念句
集「旅人」出版記念会 二月十七
日阪急八階特別食堂で開催。

阿波踊見物と鳴門観潮の会 八
月十四日十五日の両日に亘って開
催。

路郎主幹「毎日柳壇」選者に
十月

(担当 橋高薫風子)

謹賀新春

大坂形水

大阪市東区糸屋町
一ノ二

明和病院

川柳雑誌社支部

指導 西尾 栄

支部長 西尾青一路

橋高薫風子 徳米鬼美

河相すゑむ 野呂鶴汀

樋口舟遊 酒井丹詠

塚田東雲 本城弦月

吉本菁風 小浜牧人

菱田満秋 富水柳洋

木田留三 水谷策平

門永三舟 山村正雪

室田千尋 松島光一

川村山友 樋口寿栄

村上球絵 三上英路

池田文女 安田義子

島本 泰山岡半歩

事務所

西宮市上鳴尾町一三〇
電話西宮①一七六七代

明和病院内

明和川柳研究会一同

木口賀峰

吹田市松ヶ鼻一、一三七
電大阪⑧七五一〇番

ジュネーブ

ローマの南国的な強い印象のぬけ切らぬ國に僅か二時間十五分でジュネーブの飛行場に降り立った。全く申し訳の様な入国並びに税関の手続を済ませると、飛行場でスイス航空に勤めている日本女性に会った。此のYさんが此所に勤めている事は既に内地に居る時から知っていたが、かくも簡単に会えるとは思わなかった。団体のお客があると云うので暫く話をしてお別れエヤーターミナルに運ばれて来た。

此所でホテルを紹介して貰ってイタリーの事もあるのでヒヤヒヤし乍らタクシーを降りると、驚いた。地獄から天国だなど云えばイタリーのホテルの観節に叱られるかもしれないが、ジュネーブの表象である所の有名なレマン湖に面した清潔な部屋で、窓から折柄の



(ロンドン・騎兵連隊前の筆者)

日ざしに映えた紺碧の湖水を眺める事が出来、窓辺の花壇を通して多様な遊覧

船も見え、しかも一人一人の乗客に声も掛けられそうである。遙かにヨーロッパの最高峰モンブランに連なる山々を眺め、近くは湖水の中央に百米にも及ぶ程噴き上げてゐる噴水を見る。眼を少しく右に転ずると何かの国際的行事に際して両側に国旗を立てられる様に旗竿を並べたモンブラン橋がある。丁度レマン湖がローヌ河となる境界にかけられてゐるので橋の下はかなり強い流れの様であるが、この流れに一生懸命逆らつて泳いでゐる数羽の白鳥も遠目には静かに水に浮いた自然のアクセサリーの様な情緒である。全く一人で見るには惜しい様な眺めで、一人で眺めていても何かしら独り言が出る程である。

感嘆は訳の判らぬ独り言夜ともなれば適当なネオンサインと、点々とした街燈が一層湖畔の風致を美しいものにする。ジュネ

羽田を發つて

米・欧通信

足立春雄

ープで母の膝に居る様な安らぎを感じた旅行者も少くないだろう。心までコバルトブルーに託けて行く

屋が多いのに気がつく。日本が東洋のイタリーでなく、東洋のジュネーブになつてくれれば、どれ程我々は幸福であるかも知れないとしみじみ感じた。

遊覧船吉のない顔のラック(湖)・レマン

インターラーケン

ユングフラウ

ジュネーブからインターラーケンまでは初めての汽車の旅である。坐席も広いし一等ともなればよい。こちらの汽車は最近の日本の様に三等がない。運賃も一等と二等で一等は二等の二倍と云う様な事はない。ただ大きな荷物を提げての旅なので一寸無理をした。この事である。インターラーケンはスイスのほぼ中央部にあってツン湖とブリエンツ湖に挟まれた小さな町でありアルプスの中心地として知られてゐる。ホテルも日本交通公社の旅行案内に載つてゐる位であるから悪くない。此所に宿をとって翌日ユングフラウを廻遊する事にしたがどうも雨模様



(セーヌ河の遊覧船)

謹賀新春

南区医師会文化部

杏林川柳会

岩 石 南

岩 崎 一 伸

富 永 路 文

河 村 瑞 川

中 島 生 々 庵

中 島 小 石

牟 田 一 哲

安 岡 珊 枝 郎

平 尾 太 希 志

山 川 阿 茶

しい。肝腎の其の日になると昨日の雨が残って肌寒い位である。早速簡単な雨具を整えて所期の目的に向つて邁進することにした。先ずインターラーケンから標高二〇六一米のクライネ・シャイデックまでの登山電車が第一歩であるが、それまでに途中標高八〇〇米のラッテルブレンゲンで乗換えねばならない。これからは所謂アプト式で普通のレールの中央に齒車

を食い込ますもう一本のレールのついた線路になるからである。さすが此の線の鉄道になると沿線の家には少なくなるが、それでも放牧の牛が大きな鈴を首にぶら下げて不思議そうに我々の方を見ていて降りにはこの牛の二、三頭に列車が止るといふ騒ぎもあった。アメリカ大陸で見かけた様な所謂荒野は少なく、どこまでも地球の表面が丁寧に取られていたのは人間的な近親感を抱かせる。クライネ・シャイデックでは快晴に近く晴れ上り待望のユングフラウもメンヒヤアイゲルの諸峰も十分に現る事が出来た。此所からユングフラウ・ヨッホまでの鉄道は最後のアイゲル山をくり抜いて造り上げた山の地下鉄である。途中の山腹に穴をあけて外部をのぞける様にした停車場があるが、再び悪化した天候に白雲濛々として氷河どころか何も見る事は出来なかった。最終駅ユングフラウ・ヨッホは山腹に石で築き上げた豪壮なホテルの一階であり、やはりもぐらの終点である。暫く此のホテルの食堂で途中偶然出会った日本人の二人と共に名物の葡萄酒を飲んで晴間を待った。どうしても晴れそうにないので四階の展望台にエレベーターで上って見たが、どうしたところか此の山のユングフラウ(乙女)は遠来の客に顔を見せようとはしない。各国で余り女の悪口を云いすぎた為かも知れない。仕方ないので一フラン払ってアイスバー

スと云うのに入ってしまった。天然の氷を掘って作った宮殿と云う意味で壁も階段も皆氷である。氷河で形どった広間、スケート場、応接室それに周囲にある彫刻其の他の飾りも凡て氷で、氷の自動車まで作ってある。恐らくアメリカの子供であろう。之に乗って喜んでいった。零下二〇度と云うのだが、高さの關係が左程寒くない。しかしそうこうする中に頭の頂辺が変になって来た。丁度時間も無くなつたのでアルプス登山の根拠地グリ

肝疾患・疲労・二日酔

★総合強肝剤

ウロコ印



リポ (12種の成分を配合)

20錠・50錠・100錠

ンデルワールドを廻って六時過ぎインターラーケンに帰ったが、此所では再び心ゆくまで夕映のユングフラウの壮麗な姿を見る事が出来た。
ユングフラウ婦人科医者に一寸照れ

鉄道の工事だけでもワンダフル
採算は世界相手の登山線
インターラーケン
からバーゼルへ

バーゼルはスイスの北、ラインに沿った国境の街である。快適な汽車旅行を続けた。窓からの風景は全く我が国の田園風景に似ているが、唯点々とする家並の立たずまいが少し変っているだけである。此方の駅長さんや車掌さんは皆堂々として慌てず騒がず悠々たるものである。膝の所迄下った赤いビニールの(或は革かも知れない)鞆をぶら下げて検札にやってくる。一々切符を手にとって読み乍ら鷹揚にうなずいている。これで一度失敗した事がある。それは後にして
土俵入りの様に検札やつてくる
と云った感じだ。名古屋場所も大方すんだ頃だろうと、とんだ所で望郷の念が湧く。バーゼルはライン河と、スイス・フランス・ドイツの鉄道の要点となっている為、此の様な静かな古典的な街が工業地帯の中心となっているのは少なからず驚いた。製菓会社のガイギー・チバも此所にある。ガイギーの工場を見学したが、アメリカと又異った味がある。言葉を変えれば、適当に人の力に頼る大けの余裕のある機械化である。ライ

ン河を眺め乍ら名物の鮭と酒を鑑賞して右岸の小バーゼルと呼ばれる古い街を訪ねた。一七〇〇年代の家も多く見られ一々建物にその建築の年月が書いているのも面白い。
貨幣の安定している事もスイスの国柄を思わしめるもので、今尚使われている銀貨は凡てといつてよい程、戦前の年号が刻まれている。
風雪二百年唯窓わくのさびに見る

此の窓で何代恋が語られた
国柄の古き家にもお金にも夜はガイギーの人の好意でスイスのナイト・クラブを見学する事が出来た。此の様な場所は米国でも何処でも男同志行っても大して興味の無い所である。男同志がフラリッとして楽しいのは日本に限る。スイスも同じで夫婦が恋人がフレンドが狭いフロアでジャズに合せてくつついている。シャイがある云うので待って見たが、二人の女の子が裸になったまでの事である。けだし味気のない

ものであった。
金と暇なし男同志の味気なさ
これでも深夜になればどんな事が起るかも知れないが、馴れぬ一人旅は早く寝るに越した事はないと早々引き上げた。夜の街は何所へ行ってもジャズが支配している事は面白い現象である。
歓楽の夜はニグロが支配する

謹賀新年

中島生々庵
中島小石

大阪市南区鰻谷
仲之町二〇番地

★ 川柳雑誌社

婦人友の会新春句会

日時 1月29日(日)午後一時

会場 中島小児科診療院楼上

電話 三九八四

兼題 「同居」 麻生腹乃選

「和服」 中島小石選

「美容院」 太田良子選

「誘惑」 山川阿茶選

席題 当日発表(二題)

会費 三百円(食費共)

投句先 投句だけの方は郵券三十

円同封・〆切1月27日

投句先 大阪市南区二ツ井戸町

二三 山川阿茶

金 泥 集

麻 生 菫 乃 選

「餅」

餅まきへ信心の手と慾の手と 阿茶
 餅つきへあいた妓が弾く十二つき 同
 瀬戸物のお鏡鼠恐れ入り 同
 餅箱のおき処なしひとまきり 同
 暖冬の七日の粥の餅にカピ 同
 餅やける團のぐちをきかされる 若菜
 最上の款待餅をついてくれ 同
 餅つきへ一白ふやす孫が出来 一栄
 追信に餅の来る日を尋ねてい 周甫

餅のシーズン又体重がふえるがな 同
 せがむ子はあの世餅つき今年せず 酔夢
 軒並みの餅つき風景消えて行き 同
 斗争に勝った杜宅の杵の音 都詩子
 杵音へ早く喰べたい子を叱り 同
 てっちりの餅へこわごわ味をしめ 知恵
 元旦へ一足先きの餅を喰べ 同
 凶作の餅と思えぬ杵の音 たつよ
 餅だけを食べに故郷へ帰りたく 同
 残されぬ餅しられて苦労がり 同
 マーじゃんへ母はせつせと餅を焼き 清子
 火鉢の火かこんで餅の話出る 美代
 貸づきの順が待たれる子 沢山
 うれしきのなびに餅つく里の四季 きさ子
 母子寮へとどくお餅の小さいこと 美舟
 産月の初日を拝む雑煮餅 ちあき
 乳不足薬の様に餅を食べ とも子

次回題「栄転」切一月末日

研究題「灰」

切 三十六年一月十五日
宛 名 大阪府南河内郡美原町
丹上四〇四 清水白柳

親展でもないのにコッテリ封の糊
 書留の封べったりと糊をつけ
 親展でもの句は糊を使った意図がはつきりしていないのです、何か面白さをねらったのでしょうか、わざとらしさが目立ちます、書留の句は書留にする大切な手紙だから糊をべったり使ったということですが、それだけに終っているのは惜しいと思います。
 一枚の切手貼る糊見当らず一枚の切手に糊まで出して呉れ
 切手は濡らすだけで貼れるのですから糊をさがすのも少し変です、糊まで出してくれたのも一寸行きすぎのようにも感じられました。

糊つけた指をそこらでふいて置き
 カウンタへ糊をすりつけ局を出る
 指についた糊をそこらで拭いて置くという着想はだれしもが経験することです平凡を免れませんが、最後の句のカウンタへというのは、郵便局の糊の在り場所まで示している、成功している句であります、最初の句の机の脚も具体的にありますが、机の脚にが少し変に思われたのであります。
 落選の末練柱にへばりつき
 落選のポスターも糊きいたまま
 どちらの句もポスターのはがれていないのを皮肉っているのですが、その報告に終っているようです。
 糊はがしました嫁入りをさすつもり
 雄水

切手か印紙をはがして又使用するつもりだろうということなのでしょうが嫁入りとさすという語句がわざとらしさがあって成功しているとは言えませんが、若し切手か印紙でなく、何か別のものの糊をはがすというのでありますと句として句意がはつきりします。
 プロマイド彼女来る日は糊をはぎ
 隆史
 何かに貼ってあったプロマイドを彼女にプレゼントするために裏の糊をはがすというのでしうか表現の上にあいまいなところがあるので、作者が第三者に訴えるものを持っているようにあります。
 手術に備え糊気を取る肌着
 一鶴
 入院中の作者の実感かと思えます、私にはこうした経験も、事実も知らないのですが、読者に訴え

るものを持っているのは句に真実性があるからでしょう。
 洋服屋糊つけて縫いつけて縫い
 縫い目がほだけぬために糊をつかうという洋服屋を見つけた、つけたのは面白いと思いましたが、つけて縫いつけて縫いと重ねられたのもこの句を佳くしているようであります。
 夏物へ糊つけて仕舞う妻の幸
 S
 夏物へ糊をつけて片附けると色が赤く物というのですが、そうでありますと糊してではなく、糊を落してということになるのですが、作者の地方のしきたりを知らないのですから教えて頂けたらと思います。
 糊の手で孫のおしっこもてあまし
 光道
 日向でしんし張りか、張り板をつかつて糊張りをしてる祖母の

姿や、そこへ走ってくる子であらう母親の姿まで描き出している巾の広い句であります、孫でなくてはならないのではありませんが、これを内職に何かを貼っている祖母の糊の手とも考えられないこともありませんが、朗らかなものに見たいと思います。
 糊紙めた童話ですくすく皆育ち
 繁太郎
 舌切り雀の童話を句にして居られますが、この句からは舌切り雀だけでなく、桃太郎や花咲爺、かち山などいろいろのおとぎ話を思い出させます、句も平淡なうちに深さを持っているように思いました。

糊はりが椽で読んでる間に乾き
 八九寸
 明るい庭先をよよく描き出して居られます、糊はりをしてる若い主婦の心がまえたといったものまで詠んで居られますのに敬服いたしました、私の好きな句境でありますので余計に心をひかれたのであります。

以上をもつて終りますが、軸吟といったものを発表したらどうかという声もありますがつとめてそうしたいと心掛けるように致します、尚、古句なり、先輩の作品を例にひいて並べて発表してはしいとの声もありますが、仲々例句を探すが大へんですので私の記憶にある程度で今後をうした事も考えて行きたいと思つて居ります。

★ ★
句評に寄せて (4)

直原七面山

常に私達が理想としているいのちある句とは、句がそのまま句主の指図する命令に従って、その使命を完全に遂行し、句にふれる全ての人々、即ち知性、智識財の有無にかかわらず、その職業、性の別をとうでなくそれら人々の命の糧となり、血となり、肉となつて、良き人生への美しき伴侶として、昼となく夜となくいつの世までも繰り返えし繰り返えし愛唱しつづけられて行く句ではないでしょうか。少くとも私はそう信じています。

そうあつてこそ初めて、川柳が庶民の文学として、大衆の詩としてその存在価値を世の人々によって認められ高く評価されて行くのです。もし白いバラの花を見て、この赤いバラの花はキレイだとか、この黒いバラの香りはとても魅惑的であるとか、この紫のバラの弁の形はなどとしなきことをほざいていたとしたら、誰れが一体そうした人々の云うことを本気になつて聞いて呉れましょう。

味の七コ

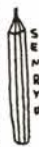
モダン 川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御門

TEL 07 6684

御集会には階上御利用下さい



人は彼らを指して、狂いめがなにをぬかすののしるに違いありません。白いバラのかもしれない出すもろもろの情緒をそのまま心に受けとめて、その純白さを、その清潔さを、その気高さを、他意なく賞味するところに、バラを愛する人々の真面目さと良識があるのではないのでしょうか。またある画家が、心血を注ぎ込み、自己の画才の全てを投げうって猫を描いているのに、この絵を見た画匠達がみな口を揃えて、この虎は実によく描けている。近年まれに見る傑作である。名画として幾百年の後の世までもその名をとどめるであろう。などと、幾百千万言をついやして激賞に激賞を重ねたとしても、果たしてこの画家は、これに歓喜の声を張り上げ随喜の涙を流して手放して喜ぶでしょうか、天下を取つた気持になるでしょうか。例え後世に残る名画として折紙がつけられようと、猫を描いた積りのその画家にとつて、虎としての激賞は不本意極まりない。

謹賀新春

吉田圭井堂

堺市浜寺昭和町一丁三〇
電堺⑥三〇五四番

田垣方大

倉敷市水島寿町
三丁目三十一番地

川柳不朽洞会

(現在月)

- 指導 麻生路郎
賛助 長谷川一徹
中田守雄
白川朋吉
中村祐吉
田中辰二
岩崎愛二
中村直勝
麻生磯次
井上吉次郎
島浦精二
恒藤恭
洞友 田村孝之介
山本雨迷
山路閑古
柴谷幸二郎
麻生緑乃
橋本緑雨
高鷺亜純
沢田四郎作
東水大八
速水真珠洞
中島紫苑郎
戸倉普天
不朽洞会員
特別会員
中島生々庵
奥村丹路
上田翠光
木村孤浪
戸田古方
西尾食子
市場没子
土井文蝶
若本多志郎
川村好郎
三村美笑
松江梅里
正木客香
黒川紫花
丸尾潮鬼
小西無鬼
西木いを
八木摩天郎
武部春果
北川春果
寺井鋭々
古川麗花
前山北海
三輪晚翠
大坂形水
井上湧三
西垣錦風
築山快夢
白石曉舟
市岡砂満
藤崎満秋
須崎豆柳
羽佐周柳
福田安夢
吉田圭開
国弘半休
長野井蛙
太田貴子
直原七面山
西森満村
河村日雄
足立春雄
榎南夏六
石川侃流
安岡珊枝
牟田瑞一
河村千容
木村方大
田垣味平
野村村堂
木村味平
福鍋丁一
真鍋白瓢
佐野梅志
後藤太志
平尾賀峰
木口雄々
小西いさ
菊田阿茶
山崎阿茶
岩井文秋
金藤文秋
伊谷光郎
那谷光郎
吉田八歩
大西八歩
石井根面郎
石井根面郎
布川筑水
桜田久米雄
浜田久米雄
菊田小松
逸見灯柳
清水恒明
徳永雅美
新川緑之助
木津柳莊
弘谷湖山
杉田耕民
増野史占
佐野史占
小口鶴秋
山本鶴秋
野村文香
小野文香
龜山晴月
富岡白星
飯降淡舟
西野竹青
林野光青
阿万柳的
岸南柳的
黄美秋柳
福鉄見星
青木遊平
大森三司
長谷川三司
若林迷右
大浜胡窓
阿形胡窓
益田眞一
山田眞一
山田眞一
山田眞一
白井三林

ることはいりません。

恐らく画家の心の中には、あふれるばかりの不満と憤りがうずまき起つて来るに違ひありません。

画家の心は闇の夜よりも暗く、さんきの涙にむせびつつ頭を深く深く垂れて行くことでしよう。

そしてこの名画を見る人々もまた、この絵を画家の意をくんで猫として眺めれば良いのか、それとも画匠達の評言を尊重して虎として鑑賞しなければならぬのか、身の処置に混乱してしまふでしやう。

川柳もまたこれと同じで、句評が句から余りかけ離れていたのでは、句主や読者が混乱するばかりでなく、句評が句に光彩を与えるどころか返って句を傷つけ、句の価値を引き下げる作用にのみ働きのこゝな悪評なら初めから句評などない方がましだと云う結果になってしまひます。

これは句評の本意ではありませんまい。
このように句の選評というものは非常
にむずかしく、評者の責任もまことに重
かつ大であります。

それでは一体、名句評（命ある句評）とはどのようなものを云うのであろう。句評はその句を褒め称えさへすればそれで句評の使命が完全に果たせるものはありません。

そして句評はまた句のアクセサリ的存在でもありません。句評は選者と句主との文学的（芸術的）心の交流によって生み出されるものであって、句を評する心根に、句主は勿論のこと、句に触れるものもろもろの人々を如何に川柳的に開眼させ、川柳的に導いて行くかと云う確固たる（川柳の）指導性を持っておらなくては

はなりません。

(句評はおそえもの、句評は褒めておけば無難と思うところに大きなあやまちの生れて来る原因がひそんでいます。)

勢い句評はその句の持つている欠陥はあくまでもこれを追求することとなります。

こをこうなせよばこの句はこうな
って句意はこうなるとか、読者に句主の
意をよりよく伝えるためにはこの句のこ
は、当然このようにならなければならないと
か、この句のここにこう云う欠点がある
がこの句のここが非常に良いので入選句
としたとか、あるいはまた、この句の表
現方法には多少の難はあるがこの句のつ
いている社会観は川柳的で良いとか、
(この句の良さは私達の生活にこのよう
に寄与するであろうとか。)この言葉は
人々の感情をセックス的にシゲキしすぎ
て悪いからこうなおしたらどうだろうと
か。

謹賀新春

二 愛 崎 岩

芦屋市呉川町六番地
電話 芦屋4603番

稻葉鳩花 下山清潮 本田恵二朗 松川杜的 馬場夢生 森本法泉子 小池しげお 竹内圭三 松村万古 藤井春日 津田麦太楼 浜野奇童 橋本幸男 高崎雄声 藤井明朗 永松東岸 野田素身郎 水藤弥平 神谷凡九郎 清水望峰 川端鬼醉 木村十悟 伊達堰子 坂田東洋男 志水礼司 不二田一夫 酒井ひか平 長尾越鳥 深見雅堂 津下京一樓 松秋六花 九川初甫 戸田喜楽 笹野旭泉子 新岡回天子 池田古心 石居高志 三村柳風子

野田 梅 西 城 石 池 榎 岡 宮 山 多 中 橘 西 岡 前 菱 小 水 加 飯 野 中 兒 野 安 杉 中 松 辻 西 阿 平 酒 西 武 早 小
田 木 川 内 坂 戸 本 口 沢 田 田 村 高 尾 部 上 川 田 浜 野 納 田 々 島 昂 口 部 本 松 岡 委 田 柳 阿 井 田 出 部 川 倉
一 宗 吾 新 桃 笛 凡 伊 三 呂 風 一 青 知 左 瀧 牧 水 山 乃 美 小 与 迷 立 辰 恒 滄 圭 柳 柳 清 若 清 へ
念 一 晃 雪 村 兒 生 男 平 子 路 郎 美 文 舟 石 羊 志 美 一 雄 浪 木 太 平 栄 菜 生 とち

内川今建杉山吉林烏室舟小梶富藤伊門工榎高谷田藤小
海竹西沼前本本 本 田 木 林 谷 永 村 原 永 藤 津 沢 中 村 島
歡 松 生 之 南 一 菁 夢 千 根 呂 冬 柳 梨 明 三 甲 紫 徹 好 烏 ぎ
太 風 薔 介 宗 傘 虹 尋 一 二 生 洋 花 林 舟 吉 光 也 祐 雀 女 ず



一
路
集

居心地

菊沢小松園 選

香林 静水 藤波 圭井堂 醉夢 豐年 光福 光昭 竜太郎 宗太郎 初甫 竜蔵 八九寸 秀峰 代仕男 生薑 文庫 庸佑 旭峯 むじな 雄水
居心地へすつかり温泉はりしてしまい
居心地がよいのか毎年燕の巣
居心地がよいか帰まつて来ない母
居心地のいい筈酒は飲み次第
居心地は満更でない回り椅子
居心地がよいのか文鳥帰つて来
居心地の良いは金の有る間
恋人が居て居心地のよい貸間
居心地の良さが吹き飛ぶ請求書
縁側の陽ざしへ老母動かない
居心地は悪くはないと酔うてる
住心地よけれど近所派手好み
居心地よし大の字になり苦も忘れ
居心地を質めて帰つた里の母
居心地がよいとまだまだ帰らぬ気
後添いが来て居心地が悪うなり
居心地がどうあろうとも動かぬ気
居心地のよさは最初の二・三日
居心地がよいのか帰ろうと云わす
居心地のよいのに転動辞令来る

瑞歩 蘭心 古心 初甫 峻艸 文平 蜻蛉 井蛙 実男 圭水 無閑 十九平 十九平 静観堂 灯竿 保夫 淀月 鶴汀 弘道 和道 義流 川鳥 白揚 花美 可住
給料も食事もよくて勤続し
坊やにも居心地よいとこ解つたり
居心地は此の家に決めた貧の神
居心地がよいらし何んにも云うて来ず
帰ろ帰ろと子供等の正直な
告げ口のそれからそれから迄変り
居心地がどうあろうとも話好き
居心地を気にしてはるばる母が訪い
居心地を前の借手に聞いて入り
孫一人居心地違つたものにする
居心地がよいのか大学まだ続け
居心地がどうのこうのと里の母
居心地を下宿の娘に支えられ
居心地はいいが定年じりじりと
居心地はいいのか末席飲みつけ
居心地がよいのか末席飲みつけ
居心地の良きプロパンでまざる
小さくも居心地の良き一戸建ち
居心地が良過ぎてお客まだいなす
住宅難居心地なんぞ言うといはず
居心地が悪いと母は直ぐ戻り
居心地に釣られ財布をはたかれ
居心地がよいのか財布を返うなり
居心地は課長の椅子のスプリング
あんまりな無口長居もして居れず
居心地のよさが三杯目を出させ

屋上

正本水客選

惠二朗 白溪子 ひか平 光道 孝風 千里 竜蔵 竜蔵 朝太 みのる 紡毛 圭井堂 秀峰 秀林 小松園
晩酌のつく居心地が帰えらせず
居心地がいいなと思う程なおり
居心地はどうあろうとも皆勤し
居心地は言わずネオンのかけに寝る
居心地を褒めて粗食に耐える日々
いま更に居心地悪さ口にする
居心地もよいが財布も軽くなり
榮転に居心地よいが落付けず
佳句
居心地を褒めて給料にはふれず
居心地がつかぬ先にと孫かえし
居心地にあきらめ端役として尽し
居心地のよい寄宿舎で身が入らず
居心地とは別に家風をはめておき
秀峰
親切がすぎて間借りのおちつけず
居心地を聞けば黙って涙ぐみ
軸
屋上の木馬へ一路エレベーター
屋上で花火大会並んで見
十階の屋上へきた昼弁当
文化の日屋上で菊と撮される
屋上でクラブ振つていい身分
屋上の双眼鏡に順があり
でしや焼きが隣のアンテナから落ち
屋上も稼がせてるビヤガーデン
屋上のビヤガーデンで捕虜になる
屋上に里が知れない雨蛙
結婚するそんな屋上のあの二人
屋上のスケッチャビルと煙突
屋上で電車の軋む音を聞き
遠火事を屋上どうし話しあい
屋上で団地マダムは喋つて来
屋上の昼寝でつかい夢をみる
愛鳩

無閑 草々 蘭道 千里 光波 藤波 惠二朗 市郎 朝太郎 博文 実男 秀峰 鮎子 平々 豊年 周甫 山椒坊 鶴汀 白鵲 鵲水 蛙佑
屋上の空気病癖ソツとぬけ
屋上に整列社長様訓示
見えぬけど我が家の方を見る屋上
屋上で明日出るのどの練習する
遠花火見るだけの客屋上に
屋上の望遠鏡に破損札
吾輩のために屋上陽が当り
屋上で見えるりんごの成りの色
屋上で秋の陽を受けコーラス部
屋上を背つぎしている中継線
屋上へ誘うて写す見舞客
屋上で洗濯乾いた音になり
屋上へ出てみたいよない天気
失職かまた屋上に昇りつめ
屋上の隅で一人が好きであり
屋上へ出て密談の型になり
屋上で腕組み火勢ジツと見る
屋上の柱もがめつく賽銭箱
恋人にまた屋上へ呼び出され
屋上の隅でコーラス肩を組み
ひとりっ子屋上の陽をひとり
猫の額のような屋上で球を投げ

色紙短冊
書画用品
大坂戎道
丹青堂
電中二二七二

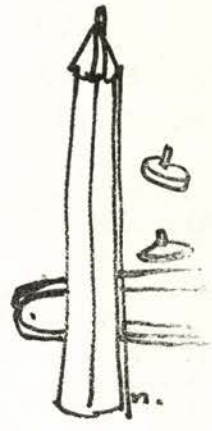
席上をビール豪華な色にする 香林

復職へ此の世をじみに生きるとし 永香

復職をして天職を意識する半休

・ 謹 賀 新 年 ・									
平 田 越 舟		三三五 広島県安芸郡舟越町		林 昌 男		二九 大阪府臺北郡忠岡町 二九北住宅三八号		小 西 無 鬼	
兵庫県多紀郡篠山町 小川町一		国 弘 半 休		山口県厚狭郡山陽町厚狭 虹川柳俱樂部		新 岡 回 天子		唐 津 市 新 興 町	
福 田 丁 路		高槻市氷室六九二ノ四 電話高槻⑥一四三〇番		村 山 光 輪					

柳界展望



句 会

▼本社新春句会は八日(日)午後一時から日本橋北詰東入る大阪観光ホテルで開催する。恒例の短冊交換会もあること故多数出席され華やかな新年の句会にして頂きたい。

▼南区医師会文化部忘年杏林川柳会(大阪市)は十二月二十七日(火)午後七時半から周防町蟬六で開催。

▼大阪通信病院忘年川柳会は十二月十三日(火)午後四時から五階会議室で開催、足立春雄医師博作の「米・欧の足あと」8ミリ映画の撮影があった。

▼南海電鉄川柳会(大阪市)は十二月二十二日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。以上路郎主幹出席。

▼岡山県下川柳会支部連合忘年句会は十二月十日日赤岡山支部で開催。

▼ひろしま川柳会第一例会は十二月一日午後六時から広島駅二階会議室で開催。

▼川柳備前支部忘年句会(岡山県)は十二月十一日、一声居で開催された。

▼新年交歓三六廻川柳大会が広島川柳会及毎日新聞社広島支局主催の下に一月八日午前十時から雑魚場町教育会館会議室で開催される。会費一〇〇円(出席者のみ)。

▼東京観光川柳研究会では一月八日午後一時から港区芝新橋六ノ六六伊藤路天居で新年句会を開催、題「牛」「晴れ姿」「娘」「温泉場」各三句、会費五〇円。

▼川柳札幌社では川柳さっぽろ三周年記念句会を一月二十九日午後一時から札幌市北四条西一丁目国鉄中央寮で開催される。会費百円。

▼青森県川柳社では新年川柳大会を一月三日正午から黒石市公民館で開催、宿題「一」「造花」「燃える」「水」各題三句吐、会費五〇円。

▼平安川柳社(京都市)では新年句会を一月一日夕六時から(会場未定)開催、題「若殿」「頂点」「牛の字一切」「翌日」各三句、会費五〇円。

▼長崎川柳社では一月第一句会を十四日に十八銀行で開催、兼題「初夢」「賀状」第二句会を二十八日に同所で開催、兼題「すき焼」「冷え症」。

▼敦賀番傘川柳会では一月十四日夕六時から郵政会館で新年句会を開催、題「酒」「話」「叔父」。

▼川柳きやり吟社(東京都)では一月三日正午から千代田区神田東紺屋町十番東京別院で新年句会を開催、宿題「新聞」。

「新世帯」「正月行事」各三句。消 息

▼福富雷童個展は十二月十二日から十七日までの六日間大阪日日新聞社本社二階ホールで開催、油彩パステル等十八点が展覧された。

▼河村日満氏(鳥取市)は十二月二日激務の余暇を割いて袋田温泉に遊ばれたが、温泉場に来て気分がのびのびしないのは故郷が温泉場のせいではないかと「散財の疲れ朝湯でもみほぐし」の句信を寄せられた。

▼大島壽明氏(熊本市)は十一月二十八日三男靖生氏の結婚式に出席のため東上された。

▼石曾根民郎氏(松本市)の川柳作品数句が、原田伴彦著「木曾・信濃路の魅力」のアルプスの街の項に、松本しなの川柳社を中心とする川柳作家の活躍のことと共に紹介されている。

▼短詩文学作品展は十一月二十四日から二十九日まで六日間大阪梅田阪神百貨店丸善画廊で開催されたが、川柳部門では路郎主幹以下二十余名が出品、路郎主幹の作品が最高価額、最高売場、梅里氏の屏風が人気のトップで非売品、阿茶さんの作品が追加注文でてんやわんや、何れも各部門を通じての話、川柳部はそれほどの好評を博した。

▼若林章右医師は故郷崎方正医師(前会長)のあとを継ぎ大阪通信病院川柳会の会長に就任された。

▼並木東田様氏(ホノルル市)から、「十月号の「南紀一泊」の葭乃・アト対談を面白く読んだ。大阪弁そのままの記述も

白浜温泉のどまん中やわらぎ台



万国観光旅館

やわらぎ

北極星別館 12月22日開館
予約受付中 電話白浜温泉167番
お申込は大阪戎橋北極星へ電話041275-7

ヒゲそり後に...

- 美容衛生剤G11
 - アラントイン
 - 水溶性ラノリン
- 配合

男性
20012

不朽の人々



京阪神急行電鉄 黒川 康 長

ふところを広く
持ちたい廻り椅子
(紫 香)

十四人兄妹の十二人目、多産系でありながら娘三人、其の点不肖の子と云えましよう。

世話好きと云うのか、お人好しと云うのか、こそこそ動いて大変忙しい身分ですが結構それで楽しんで居ます。

不幸と云えば先妻に死なれたことひとり仏壇に手を合せている淋しい面もあります。

の暮」▼門水三舟氏は十二月十三日上京され、旅先よりとして、「六階で銀座の焼芋(いも)の美味なりし」「一人旅太平洋の音を聞き」の句を寄せられた。

句集

▼高野むじな著第二句集「あしあと」が昭和三十五年吉日不二書房から出版された。著者の数年来の恋の句百句が掲載されている。

(非売品)▼にしなり句会特輯号「にしなり」が昭和三十五年十二月一日川維にしなり支部から発行された。後藤梅志支部長以下五十八名の昭和三十五年度の句の集大成。A5版三十一頁、定価五十円

▼大阪府立羽曳野病院では第八回芸術祭に羽曳野芸術祭の特別号を刊行された。

▼石居高志氏(東京都)夫人まさ子さんは十二月五日午前十時五分子宮外妊娠のため死去された。年三十三。哀悼。

転居

▼木村孤浪氏(横浜市)は左記へ転居された。横浜市港北区師岡町三五六

▼川柳宮城野社は仙台市東八番丁一七〇(後藤方)へ移転

正誤

前号二十九頁四段七行目の大阪形水氏の句「それぞれの果立ちおとんぼだけ残り」とあるは「それぞれに果立ち」の誤りにつき訂正。

★常任理事会
十一月二十六日
午後七時から南
区三休橋南詰中
島小児科診療院
楼上で開催。

一、戸倉普天氏を不朽洞々友に推薦の件

一、忘年句会並びに新春句会の件などを審議し時散会した。出席者は路郎、生々庵、文蝶、好郎、梅里、葉、いわを、水客、紫香、恒明、竹荘の諸氏。

★退会一戸倉普天氏(兵庫県)は十一月をもつて作句上老骨で参与としての責めもふさがれぬからと不朽洞会員を辞されたので、多年本会のため尽瘁された功により、改めて不朽洞会洞友に推薦された(多)

★新春句会 ★川維支部

★淀川句会 11日(水)六時、題明日・トッブ屋・ひとすじ、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局、京都句会 16日(月)夕、題、鶴・仰ぐ・附箋、所、四条繩手仲源寺、★にしなり句会 22日(日)六時、題、鹿・女房・晴着、所、

玉出新町通一ノ一後藤梅志居、★鳥取句会 8日(日)一時、題若・祝金・温順、所、ちづばし畔りいち画房、★米子句会 15日(日)一時、題、牛・待つ・絵、所、米子市公会堂和室、★明和研究会 15日(日)一時、題、寝正月・牛・友達、所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、★玉造句会 10日(火)六時、題、序の口、計画・トランプ、所、市電玉造南二百米大阪信用金庫、★阿倍野句会 18日(水)六時、題、プロログ・値上り・笛、所、旭町二丁目金塚会館、★こまつ句会 8日(日)一時、題、計画・勢い・余興・顔色、所、日の出町日の出湯二階、★かがみ句会 7日(土)午前十時、題、福の神・箸紙・免許・役員・招く、所、池田古心居

★備前句会 題、雑煮・甘酒・小粒・走る・捨る、所、横山一声居

★南海電鉄句会 26日(木)六時、題、ガイド・はじめ・音、所、難波親和クラブ。

高鷲亜鈍者

詩川柳考

B6型函入 定価三百八十円 送費三二円

▼著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であつたがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した/今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す/ここに川柳維誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る/凡そ前向作家を自負する柳俳人絶対必読の書です。

★目下製本中ですから新春早々に刊行されます。

★五〇〇部限定版につき御申込は早く。

★御送金は川柳維誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。

(切手代用可)

大阪市住吉区区内万代西5丁目25

発行所 川柳雑誌社

電話大阪06081振替口座大阪75050

岸 南 柳

男まえ製造所

新年宴会 には

あたたかい 鍋料理

すき焼と

もみじの名所

竜田大橋下車

本

電話竜田一六二

料理は一流 値は三流

酌は有芸 仲居揃い

予約申込み受付

大阪連絡所

天王寺の

九六五六

竹 荘、竹 青 へ



川 雑 ジャー ナ ル

本社 句会 35年度全出席の人々

— 傍島静馬氏は七年連続出席

句会には出席記録を作るところではないが、一年間全出席するにはそれ相当の苦労が付きまとうものである。

その一年間は健康であった。そして家庭的にもあたたかく恵まれていた。

そうした幸福な年月をつみ重ねて、七年間全出席という、前人未踏の傍島静馬氏に心からの祝福をおくる。

このほか、富岡淡舟氏の六年間をはじめ菊田いさむ氏・木村十悟氏・見島与呂志氏等も三年、四年と連続出席されたが、タッタ一日欠席のため、連続がストップされたことは惜しい。

七年連続

傍島静馬

神戸からの出席で七年間連続といえ、おそらく日本一の記録保持者だとおもう。すでにお年もかなりとられてはいるが、七年間ときけば斜も正そう美談ではないか。

五年連続

金井文秋

「四年かな」と言っていたが句会部で調べると五年連続である。忙がしい月初めの配本を自転車で行き回わり、町会の役員もしているで何かでぶつかるときもあったが、ちょっと顔を出して句会へ逃げたこともあったという熱心な人である。

四年連続

若本多久志

西田柳宏子

河井庸佑

不二田一三夫

31年の文化の日に一日だけ休まれた若本多久志氏は、その一日だけで六年連続がならなかった。三つの会社の重役さんという重職で、東京—金沢—大阪をとり回わるなかでのご出席だけに頭が下がる。

玉造支部のホープ西田柳宏子氏、アベノ支部の河井庸佑氏はともに若い人たちだけに、これからさき何年続くかわからぬたくましさがある。

三年連続

石倉旅風

河相すむ

樋口舟遊

石倉旅風氏の熱心さ、堅実さがそのまます全出席となったようである。路郎先生の古稀祝賀句会へ

病院から抜け出して、その以後全出席という河相すむ氏、また同じ明和病院出身の樋口舟遊氏も三年組である。闘病生活をされた人々とは見えぬタフ

などこは明和魂というのであろうか。

二年連続

橋高薫風子

菱田満秋

山川阿茶

本当は五十回以上連続になっていたのに、33年正月句会をカゼ発熱で一日休んだために、三年連続ならず、と嘆く橋高薫風子氏である。菱田満秋氏は天理の病院を退院以後ずっと全出席街道を行く人で西宮支部は実に二年以上の五人の連続出席者を出しているのである。団体賞を提案する。

山川阿茶さんは女流作家ただ一人の二年連続で気を吐いておられる。

一年の人々は、黒川紫香・長谷川三司・吉田圭井堂・高津徹也の四氏。三司氏も紫香氏もその以前には連続の年もあったかと思う。

五年、七年、十年の全出席者には何か永久に残せるような記念品を贈ってはどうか。——さすがに以上の16氏はいずれも不朽洞会員ばかりである。

小児科・沢田医院

沢田四郎作

 大阪市西成区玉出
本通り一ノ三
電話(06)二九一三

勝、準優勝は樋口舟遊氏と、ともに連続出席の方々が抜群の成績をのこしたのは偶然でなく、柳神は熱ある人にはほえんだのである。

(不二田一三夫)

特 約 店

 トーアテックス
ナカボーテックス
竜神コンビード
オキツテックス

株式会社 沢田商店

大阪市東区平野町四の四七

電話 2705・4003・4888・8415

 スーパート
着心地のよい

O.S.K.

レディースード

薔薇 大坂商店

 大阪市東区平野町一丁目二番地
電話(94)1745・5563番

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

スペースの関係で本社の師走川柳大会
の入選句や、そのほか次号回わしになっ
たのがあります。ご諒承ください。

—編集局

川維にしなり支部句会（大阪市）

後藤梅志選

よせ書きをした日の丸を子に聞かれ 柳志
久し振り掲げる旗が見当らず 竜昭
日の丸を壁に暴力団首領 晃
日の丸に湧く歓声も交り果て 清人
貧しさにせて日の丸高くあげ 千尋
脱殻機なる故郷の澄んだ空 連
散髪に行きつけがあり澄んだ空 梅志
アルサロの澄んだ瞳が忘れず 亜純
三四年遊べと無理な聴診器 六竜子
三回忌おんなじ秋の花であり 水客
三年の辛抱などと他人言う 白柳
サーカスの儲けた跡へ鳴くもろ 九鬼
明日の鑑研ぐ手へこおろぎとてくる 生薑
リユウサワコおろぎ一匹まざれこみ さかえ
こおろぎのむくろのあまりにもかろき 夢虹
星のこおろぎ僕の机の上まで来い 満潮
雨止んでこおろぎもとの声になり 三司

川維淀川支部句会（大阪市）

木村水堂報

胃袋の鳴るのが人に聞えぬか 句念坊
胃袋を切られてやと酒にこり さぎす
胃袋に馴染まぬ膈へ段まり 水堂
秋の野を行く試歩ジャマがはずる 一鶴
ジャズ好きな妻で佃煮食わされる 東洋男
ジャズわめく青春じつとしておれず 若菜
信頼はしてまずと女逃げる気の 三舟
夫より株屋の方を信頼し 花村
信頼性が何うのと証人台は子供 六竜子
信頼を二男秘書課の平に寄せ 清生
信頼へ答える方の荷が重く 礼司
同行二人信じお遍路さんひとり 香林

川維阿倍野支部句会（大阪市）

金井文秋報

しんがりの幹事が虎を連れてくる 義介

川維玉造支部句会（大阪市）

西出一栄報

見送りの切れたテープをまだ握り 清子
見送りの波へ一つの顔探す 柳宏子
瀬戸際で思わぬメモが物を言い 貞句朗
メモを取る手先ふるえる大下落 句念坊
このメモが一人の命救うメモ 正一
はやり風下火になった頃にひき 白柳
破産者も出してブームがもう下火 文秋
タクシーで急いで来たのにまだ見え 守信
約束の子供に時間教えられ 清
そんな約束しましたかなとこぼれ 一栄
約束を守り孤独の日を送る 春草

川維ハワイ支部句会（ハワイ）

築山快歩起報

一人子の我儘親の眼に入らず 水泉
母なればこそ我儘を聞いて呉れ 風草
一人子の我儘通し嬉しがり 美潮

品質優良
先チカペン
TACHIKAWA PEN
タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ面紙

大阪府東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

食卓の料理へ文句罐を開け 紅溪
反抗期敵父恐れぬ口も出し 萩路
我儘を云われた程惚れて居る 浅太
妾宅の方は我儘きく所 曉舟
我儘は泣けば通ると子は覚え 平八郎
我儘へ夫飼育の手を見つけ 峯円
我儘も妻には云えぬ恐妻家 内海
同権の妻我儘に捉われず 坪山
我儘の女房さ出でいらぬ世話 周防
末ッ子の我儘姉の気に入らず 須戸子
更年期妻の我儘聞いてやり 魔花麗
盲目の愛に育って手にあわず 銀水
我を通し勝ったそのあつら 恵津子
我儘を許してと書く置手紙 エス子
オールドムス我儘云うて嫁き損ね 旋風
我儘もフアンと秘書にあしらわれ 青風
泣き寝入さして毛布をそと掛け 紅茶

泣寝入しなはれ相手はボスだつて 快夢起
泣寝入持たぬ非力の眼をつむり 柳葉
泣じやくり寝入った孫の独り言 玉屋
上役を立てて切ない泣寝入 緑星
我儘の孫に入歯を取って見せ 弦月

川維 篠山支部句会 (兵庫県)

酒井ひか平報

診察のお目出度ですと保証され 多津男
診察が遠のく程に恋を知り 初穂
年甲斐もなく医者若くどきどきし まさ子
家中の目が診察へ光って居 澄代
医者に診て貰いと背中なで居り 泰子
誤診とは云わず今日から薬かえ みのる
顔を見ただけでカルタが出る馴染み 永断
さすが丹波のすしに栗が入り 凡石
盛り合せ寿司へ遠慮の手が延びず 無鬼
鉢巻きで握る威勢の味自慢 多津男
客去んで残ったすしを子がつまみ 幸風
巻きすしのしほは母の星が済み 可住
すし嫌い紅しようがだけつまんとき ひか平

川維 浜寺支部句会 (堺市)

川村好郎報

浦島のように代表もてなされ 雄声
代表の一人はなだめ役の筈 圭井堂
代表も無理だと思ふ案を持ち 左久良
冷房の効いたところで立話 南宗
冷房完備ですと宣伝に汗をかき 東天紅
片道は母にねだつた里帰り 小石
告別式名刺こつつけ蔭の身 好郎

フアイトもう遠い昔の年になり 裕邦
代表を買って世話好き如才なし 狂二
代表はまるくおさめて辞める肚 圭水
片道はあなたまかせの一等車 生々庵
出しやばりが代表になつて恥をかき 青蛙

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

前世へ何か忘れて来た児の絵 鳥雀
黒髪のがいがおきわすれてある 紫蘭
縄を張った枯木に有る歴史 和三郎
生活に疲れた膝で折る枯木 磯彦
大売出し枯木もみじのさかりなり 一彦
手に職がある幸せをうらやまれ 子寛
幸せを持ってあくせく貧に堪え 親生
又肝臓に相談して呑む事にする ゆきら
住心地どうでも我が家のありがたき つる子
水道の雫わが家の住み心地 幸男
雨降り秋の女は雨憂う 司郎
落葉せよ女は髪を染めている 正次
からかえば三十女の笑う秋 晴芽
わら灰へ屈むおいもやく女 千瀬
乳母車押す母の手と父の腕 一本歯

川維 西宮支部句会 (西宮市)

若本多久志報

金のあることは反対しとくなり 夢虹
外人の横に立って 不憚 花美
ええ仲で反対ばかり申しとり 泰
内心は反対だけ手をあげる 三舟
本棚に本ありなにか満ち足りる すゝむ
乳母車押す母の手と父の腕 一本歯

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

1月号発売中

130円(〒12円)

特集

- 新取扱い いまの食品・これからの食品
- 清酒は戦国時代
- 清酒の合理化対策
- これからの食品添加物

講座

- ◇子の製造利用特徴
- ◇活性剤の性状と種類
- ◇界面活性剤の包装
- ◇酸阻害剤の包装

- ◇海外ニュース ◇特許ニュース
- ◇意匠ニュース ◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

大阪市北区 食品と科学社 振替 6702番
大幡町5-5-4 電話 345231-4

川維 名古屋支部句会 (名古屋市)

野田一念報

その手には乗らぬとて駒をうち 三乗
子供達の作戦と知り乗ってやり 千古
作戦がばれてあべこべ利用され 清流
なまつばのんだ処で幕が下り 帯丸

本棚の裏から酒を出すも秋 満秋
恥しいから表情をかえもせず 寿栄
本棚に秋の気配のかくれなし 薫風子
十字架の外人墓地は海へ向き 舟遊
酔うてこぬ倍表情のない妻侍り 一十
結着という値もいちど値切つてみ 静馬
すれ違ふ外人煙草の匂いする 三司
大またに行く外人に追いつけず 正祐
外人の手真似へ店員も手真似 牧人

川維 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山報

腹立てて見たがお世話にいつたり 賤女
新聞に誤植見つけた日のゆとり 幸堂
農繁の具はピーマン焼いただけ たつよ
統制がとけて値上げが腑におちす 登仙坊
移り気な心を責めているコケン 山茶花

生と死のすれすれをゆくスラム街 いさむ
偉丈夫な父選厝に涙ぐみ 明一水
選挙ともなれば祝電村に 来る 一念
花東が合図のように発車ベル 千代春
七五三背より高い千歳飴 千明
吾が胸の古傷えぐる夜の雨 不二郎
美しい割に手荒な外科の女医 千種
泣いて来た傷に赤チンそと塗り 三乗

意識して笑う女の片えくぼ ちとせ
 だだこねる子のかけひきに引つかかり 生 薑
 退院へ妻が揃える 桐の下駄 文 舟
 菊日和術後の夫に肩を貸し 天仁坊
 釣り天狗の口程になく雑魚二匹 しおり
 パチンコにウツラン晴らす一人者 一 患

サツマ芋製めればくれる秋になり 宇奈月
 豊作が伊勢路へ初の旅をさせ 杏 朗
 富士山を背負う女の茶摘歌 要 人
 スイッチ入れるだけに要る女の手 柳 谷
 襟足の白さへ掘む男の目 七面山
 深酔いの感傷を増す軒あかり 汎 磯

感傷と食欲の増す秋となり 益 子
 感傷の涙みせてみる禿頭 幸 子
 感傷を誘うチャルメラ腹に浸み 怪 童
 アンミツ片手に枯葉を聞く感傷 房 子
 淋しさへ急ぎも出来ず松葉杖 白 仙

アルバムにセンチな頃を教えられ 乱 童
 いつまでも見送る母へ振る帽子 天 童
 感傷の坊や小さく反抗し 秀 宝

帝化川柳会 (大阪市)

谷沢好祐報

口ほどにうまくないのが土産物 柳 彰
 古里の臭いを土産に父が来る 孝 夫
 お見送り蔭では土産当てにして 風 柳
 こんな事するなと土産開けており 一 徹
 宴会の土産は折の隅に寄り 真砂老
 遠足の土産子供に指図され 九 紫
 仕度した荷物が語る決意なり 蒼 芒
 身仕度をした母ちゃんに若さ 雅 堂

一番の子を追いかける保姆の旗 京一樓
 そう云うなそこが一番似てるとこ 一 男
 成績はビリだが喧嘩ならトップ 好 祐
 七輪に鉢巻さして又使い 雄 水
 鉢巻へあなたの個性どこへいた 晴 暉



鉢巻をした晴耕へ息が切れ 白 水

大阪遞信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

左前それでも飛行機でする商用 史 葉
 左前の人とは見えぬかくし芸 春 葉
 左前の噂に家族等ちわくまり 竹 志
 天災に老婆の皺も大写し 春 雄
 天災を空からうつしにくるカメラ 竹 莊
 天災が出雲の神となる皮肉 没食子
 裏切りを打ちあけられて気が悪し 宏 子
 見送りに来た裏切りと手を握り 幸 男
 仲居もう二号になつて見かえす気 風船堂
 もんじ狩りオサにタンゴチャツチャツチャ 神 峰

投売りの月末限りまだ続き 草 右
 月末は女にまかし釣に出る 愛 論
 年甲斐も無く情熱につりこまれ 竹 青
 左前土蔵のあるのがよけわびし 藤 児
 左前になつてもスローなおろない 路 郎

杏林川柳会 (大阪市)

生々庵居

伴へは本音も吐けず伏せておき 一 哲
 手放しの涙へ主治医立てもせず 阿 茶
 発奮が七日七日に薄れゆき 生々庵
 しきたりを離れ祖母に聴きにゆき 珊枝郎
 しきたりが十九の娘を家出させ 太希志
 盲点をつかれ当局手が出せず 一 伸
 なれそめをきかれバママのあわてよう 小 石
 発奮へ父どうしてもうなづかず 瑞 川

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

単線の折返すまでセーター編み 句念坊
 一本線島ながしに似た一人待ち 宏 子
 単線の旅も楽しい山秋の秋 宏 子
 単線のここらあたりの柿うまし 貴 山
 単線は助役の顔も田舎じみ 鳥 莊
 単線の駅のホームに稻はされ みなづき
 単線の駅長切符もお茶汲みも 新 石
 単線に乗って湯の香が強くなり 和 郎
 単線のここ地図にまで忘れられ 圭 水
 単線は窓から柿が千切れそう 路 郎

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

好みまで違いましたと失恋し 柳 太
 りんどうの花一枝にもある好み ともこ
 親好み児は迷惑な舞姿 周 一
 お彼岸へ休みが続く旅プラン 尚 史
 お彼岸にアロハの僧が来る時代 紅 月
 落選がつづき家族もさしを投げ 喜八郎
 板べいへ落選の顔が笑みつづけ 六童子

野獣会第一回句会 (奈良市)

内海敬太報

トラックから夫人の涙声聞こえ 力
 解散近く大臣の嘘大きくなり 善 介
 役員選挙から反主流派が生れ 一 邦
 心にもない嘘も出る総選挙 仰 天
 落選の悲報へ達磨見下げてい 敬 太
 当選の涙大きく写される 峰 水
 花時計船乗さんと撮される 舟 遊
 コチコチと刻む時計の根気よき 榮 作
 入試の顔監督の顔目と目 浩 司
 文字に引く赤線多く試験待つ 正 重
 キャンプ村目覚一つない夜明け 宇 彦
 候補者の選挙前後の顔違う 勝
 当確の知らせぐつすり寝てしま 牧 人

大萬

千日前大劇裏
 TEL 〇二七二一〇
 アベノ橋近地下
 TEL 〇一四七

梅里の店

★大万川柳(第百十九回)を募る
 兼題 「ベッド」 路郎先生選
 締切・一月十五日 (五時以内)
 発表・一月廿一日 (金曜発表)
 投句先 阿倍野区松崎町三ノ三
 大万川柳会宛



柳 樽 室

★本誌を愛読して下さる方々、本誌へ寄稿によって協力される方々、本誌へ広告によって支

援をたまわる方々へ感謝の意を表し謹んで新年の賀詞を申述べる。

★お蔭で本誌も順調に発展し、年々新企画による躍進を、声を大にして云い得られるのもうれしいきわみである。本年も相変らずのご愛顧をお願いする。

★本誌の運営方針が一般社会と同じであつても、究極は金儲けの仕事ではない。よき川柳作品の発表機関であつて、お互いの人生をよりよくすることに

ことは云うまでもないのであるから、出来るだけ卓越した作品を寄せていただきたい。新しい革袋には新しい酒を盛ることを、お互

に忘れてはならない。★戦後特に敬意が薄れたのが、教師の鉢巻的

行動と、郵便局従業員の遅配である。私は教師が労働者であり、薪すべを食って生きられるものでないことを否定するものではないが、仕事の性質上、単なる労働者でないことだけは自覚する必要があると思うものである。

郵便局の従業員について、性質は違ふが公共的な労働者として大いに反省すべきものがあつて欲しい。そこには彼等の予測しない多くの悲劇を生ずるからである。自己の主張のために、あらゆるものをギセイにして悔なしというのである。何をか云わんやであるが、人類は終局において共存共栄でなければならぬ。でないとするならば、そこには厚生省も福祉法も無用の長物だと云わ

ねばならない。

★私もだいたい四十代の元氣になった。「ことしは大いにやるぞ」と云うと、老妻が、背後から「もう年ですよ」という。老妻のブレイキが、私を永生させせてくれるのかも知れない。プープーである。

ねばならない。

川柳雑誌社

麻生路郎
麻生霞乃
中島生々庵
編集局

北川春巢
戸田古方
清水白柳
丸尾潮花
真鍋一瓢
水谷竹莊
不二田三夫
後藤梅志
橘高薫風
西川晃

句会部
黒川紫香
総務部
八木摩太郎
林宏子

新春を賀し奉る

★記事フクソーで戸田古方氏の「絵と川柳で表現する歴史」や「続・川柳書架」を割愛す

る。それら待望の東野大八氏の「風流人間横丁」は、これの多忙裡に刊行、高鷲亜鈍氏の「詩川柳考」は最早製本を待つばかりとなった。これで、私の「川柳窓口談義」が出版、誌巻四〇〇号の祝賀記念出版の約も果たせる訳だ。これから、ボツボツ私のものにかかるが、案外早く出来るだろうと思うのでよろしくご好評を！それに次いで本年は続々出版企画があることだけをお知らせしておく。(路郎)

★ペンの散歩

▼あけましておめでとうございます。と一年に一度は書く文字だが、なんとも云えぬいい気持ちである。この言葉と葉を交わしあうとき、身には晴れ着、心にはほえみという、なごやかな正月風景の中であるからであらう。

▼1961年へ一歩ふみだす門出に「囀目される戦後作家」を諸大作家にご執筆ねがった。柳界諸派の作風地図を見るように興味深いものがあるとおもう。

若本多久志著 麻生路郎序 好評噴々

川柳 親ところ子心

価 150円
送費24円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ところ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い集めたのが本書である。登録された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知らしめる、実に有意義な書である。

川柳雑誌社
大阪府住吉区西五ノ二五
振替口座大阪七五〇五〇

初詣

社大鳥大 住吉大
大八幡 大鳥大
八幡神社 大鳥大
いざなぎ神宮 大鳥大

電車バスとも大増発

南海電車



2階電車で すてきな夢の旅

初詣も初旅も近鉄特急

お伊勢さん初詣と伊勢志摩

伊勢市駅 または 宇治山田駅下車

大阪から 特急 2時間.....のりば 大阪上本町
 31日から 初詣特急・越年号・迎春号・増発
 定期特急 毎日 8.10 9.10 12.10 14.10 16.10 18.10
 ・座席指定特急券 片道 200円 運賃 340円

名古屋から 特急 1時間35分.....のりば 近鉄名古屋
 31日から 初詣特急・越年号・迎春号・増発
 定期特急 毎日 7.35 9.35 12.35 14.35 16.35 17.35 21.00
 ・座席指定特急券 片道 200円 運賃 260円

☆特急券は 近畿日本ツーリスト 日本交通公社で発売

本社 大阪市天王寺区上本町6

近畿日本鉄道

★新春からこの句帖へ

路郎好みの素晴らしい句帖です。
 常にあなたのポケットへしのばせて下さい。

句会の賞品にもご利用を！
 ご注文は川柳雑誌社へ (一冊五五円 送料各八円)

新春の書架に
 ぜひお備えを!!

川柳の味わい方・五百数十句
 価二五〇円 送料三二円
 上質B6版 二五〇余頁

大阪市住吉区西五丁目二五番地
 川柳雑誌社
 振替口座大阪七五〇五〇
 電話 大阪 六〇八二

竹柳館賞

麻生路郎著 好評噴々

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって
 帰還した著者のザックパランな人生批判
 が、その雄筆からほとばしるさまは凄
 い。まるで腕の冴えた板場の切れ味にも
 似ている。

★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に
 掲載され、好評、サクサクたりしものに
 補筆した雄編である。後半に川柳に関す
 る卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお
 薦めしたい。

★ご送金は川柳雑誌社振替口座七五〇五〇
 (番をご利用が便利で安全です。
 切手代用可)

お待たせしました 最新刊の 東野大八著 風流人間横丁

価二五〇円 送料 三二円
 B6型 二五八頁

printed in Japan

(禁転載)
 昭和三十三年十二月廿五日印刷
 昭和三十六年一月一日発行

大阪住吉区西五丁目二五番地
 行印刷所 麻生幸二郎
 大阪住吉区西五丁目二五番地

発行所 川柳雑誌社
 電話 大阪 六〇八二
 振替口座大阪七五〇五〇

B列5号 毎月一回一日発行
 川柳雑誌 第三十六年
 第一号
 定価 七〇円
 (送料四円)
 半力年 八四〇円
 一力年 一四四〇円

▼▼▼▼▼
 投稿規定
 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏
 名雅号を明記する事。
 「近作柳樹」は一般作家の雑吟を募
 る。
 「課題吟」は誰でも投稿が出来る。
 「川柳塔」の投稿は不刊会員に限
 る。

近作柳樹 (雑誌十句以内) 麻生路郎 選
 文川柳塔 (雑誌十句以内) 北川春葉 選
 章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎 選
 (毎月十五日締切)

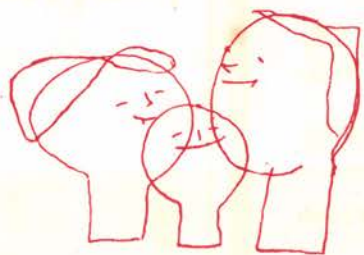
毎号募集

課題吟募集
 松江梅里 選
 山根白星 選
 木村水堂 選
 (二月十五日締切)

催進
 十句以内
 テンボ
 十句以内
 迷惑
 十句以内
 末座
 十句以内
 ブルジョ
 十句以内
 移り気
 十句以内
 市場没食子 選
 長野文庫 選
 菊田いさむ 選
 (二月十五日締切)

募
 集

一家そろってホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ⑥551-2



お酒と疲労に！

悪酔・二日酔をふせぎ
総合的に体力を増強します

肝臓にはヤッパリ

強力 **ホストン**
ゴールド



30錠・100錠・300錠

一番よい酒
うまい酒



清酒
菊正宗

宮内庁御用達
株式会社 本嘉納商店
神戸・灘・御影